

浦<sup>うら</sup> 辺<sup>べ</sup> 古<sup>こ</sup> 墳<sup>ふん</sup> 群<sup>ぐん</sup>

大<sup>おお</sup> 浦<sup>うら</sup> 古<sup>こ</sup> 墳<sup>ふん</sup> 群<sup>ぐん</sup>

梅<sup>うめ</sup> ヶ<sup>が</sup> 崎<sup>さき</sup> 古<sup>こ</sup> 墳<sup>ふん</sup> 群<sup>ぐん</sup>

小<sup>お</sup> 郡<sup>ごおり</sup> 開<sup>かい</sup> 作<sup>さく</sup> 経<sup>きょう</sup> 塚<sup>づか</sup>

—一般県道山口阿知須宇部線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告—

1998

財団法人 山口県教育財団  
山口県埋蔵文化財センター

## 序

本書は、山口県山口土木建築事務所の委託を受けて、財団法人山口県教育財団が実施した一般県道山口阿知須宇部線緊急地方道路整備事業に係る浦辺古墳群、大浦古墳群、梅ヶ崎古墳群並びに小郡開作経塚の発掘調査の記録です。

私たちにとって先人が残した文化財は、ふるさとの歴史を理解する上で、大変貴重な財産です。この文化や伝統を継承することは、21世紀に向けて活力と潤いに満ちた社会を創造するために欠くことのできないものです。これらの文化財を損なうことなく未来へ伝えていくことは、今日、私たちに与えられた課題であるといえます。

遺跡の保護については、埋蔵文化財保護の立場から基本的には現状保存が望ましいものでありますが、やむを得ず消失することになった地域については、発掘調査を実施し、記録保存を行うこととしております。

このたび、一般県道山口阿知須宇部線緊急地方道路整備事業に先立ち、関係諸機関と協議・調整を重ねて参りましたが、当事業によって失われる範囲について発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、浦辺・大浦・梅ヶ崎古墳群では、合わせて20基もの古墳が見つかり、古墳時代後期に県内有数の群集墳が営まれていたことが判明しました。また、小郡開作経塚では経石が出土し、江戸時代初めの一字一石経塚であることが確認されました。得られた数々の資料はこの地域の当時の様子を知る貴重な手がかりとなるものです。

本書はその調査結果をまとめたものであり、収録された資料が、教育・学術・文化の振興のために広く活用されることを願っています。

終わりに、調査の実施にあたって御協力いただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成10年 3月

財団法人 山口県教育財団

理事長 上野 孝明

## 例 言

1. 本書は、財団法人山口県教育財団が、平成8年度及び平成9年度に実施した浦辺古墳群・大浦古墳群・梅ヶ崎古墳群・小郡開作経塚の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、財団法人山口県教育財団が山口県山口土木建築事務所の委託を受けて実施したものである。
3. 調査組織は次のとおりである。

### 平成8年度

調査主体 財団法人山口県教育財団

調査担当 財団法人山口県教育財団指導主事

豊島 正行

新江田智司

平海 泰政

奥原栄一郎

### 平成9年度

調査主体 財団法人山口県教育財団

山口県埋蔵文化財センター

調査担当 山口県埋蔵文化財センター指導主事

豊島 正行

山本 義信

大村 秀典

奥原栄一郎

安部 康史

4. 調査にあたっては、山口県山口土木建築事務所、山口市教育委員会・小郡町教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
5. 調査及び本書の作成にあたっては、山口県埋蔵文化財センター職員の助言・協力を得た。
6. 本書の第1図は、国土地理院発行5万分の1地形図「小郡」・「宇部東部」を使用した。第2図・第16図・第104図は山口市役所都市計画課、第126図は小郡町役場都市開発課提供のものである。
7. 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）で示し、標高は海拔標高である。
8. 出土遺物のうち石製品の石質については、山口県立山口博物館専門研究員亀谷敦氏の御教示を得た。なお石質鑑定は表面観察によるものである。経石墨書文字の判読は、山口県文書館専門研究員吉積久年氏、山田稔氏の御教示を得た。経塚石塔の碑文の判読については山口市歴史民俗資料館名誉館長内田伸氏並びに小郡町文化資料館館長竹重久氏に御教示をいただいた。古墳の石室の石材の鑑定は、山口短期大学特別講師宇多村譲氏の御教示を得た。
9. 本書に使用した土色の色調の表記はM u n s e l l方式による。  
農林省農林水産技術会議事務局（監修）「新版標準土色帳」
10. 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
11. 土器実測図について、断面黒塗は須恵器、白抜きは土師器を表す。
12. 石室実測図面の濃い網掛けは墓坑の基底面を、薄い網掛けは閉塞石を、墳丘土層断面図の濃い網掛けは地山面を表す。
13. 本書の作成・執筆は、豊島・山本・大村・奥原・安部が分担作成し、豊島が編集した。

# 目 次

第1章	遺跡の位置と環境	1
第2章	調査に至る経緯と調査の概要	3
第3章	調査の成果	
第1節	浦辺古墳群	5
	1. 1号墳	
	2. 2号墳	
	3. 3号墳	
	4. 小結	
第2節	大浦古墳群	19
	1. 1号墳	
	2. 2号墳	
	3. 3号墳	
	4. 4号墳	
	5. 5号墳	
	6. 6号墳	
	7. 7号墳	
	8. 8号墳	
	9. 9号墳	
	10. 10号墳	
	11. 11号墳	
	12. 12号墳	
	13. 小結	
第3節	梅ヶ崎古墳群	113
	1. 1号墳	
	2. 2号墳	
	3. 3号墳	
	4. 4号墳	
	5. 5号墳	
	6. 小結	
第4節	小郡開作経塚	129
	はじめに	
	1. 位置と環境	
	2. 遺構	
	3. 遺物	
第4章	まとめ	147
第1節	古墳群について	
第2節	小郡開作経塚について	

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第19図	1号墳石室内遺物出土状況図	22
第2図	浦辺古墳群調査区設定図	5	第20図	1号墳遺物出土状況図①	22
第3図	1号墳墳丘遺存状況図	6	第21図	1号墳遺物出土状況図②	23
第4図	1号墳石室平面図	7	第22図	1号墳出土鉄製品実測図	23
第5図	1号墳石室内遺物出土状況図	8	第23図	1号墳出土装身具実測図	24
第6図	1号墳出土鉄製品実測図	9	第24図	1号墳出土馬具実測図	24
第7図	1号墳出土馬具実測図	9	第25図	1号墳出土土器実測図①	24
第8図	1号墳出土耳環実測図	10	第26図	1号墳出土土器実測図②	25
第9図	1号墳出土土器実測図①	10	第27図	2号墳墳丘遺存状況図	28
第10図	1号墳出土土器実測図②	11	第28図	2号墳石室平面図	29
第11図	2号墳石室平面図	14	第29図	2号墳出土装身具実測図	30
第12図	2号墳出土鉄製品実測図	15	第30図	2号墳遺物出土状況図	31, 32
第13図	2号墳出土装身具実測図	16	第31図	2号墳出土土器実測図①	33
第14図	2号墳出土馬具実測図	17	第32図	2号墳出土土器実測図②	34
第15図	3号墳墳丘遺存状況図	18	第33図	3号墳墳丘遺存状況図	36
第16図	大浦古墳群調査区設定図	19	第34図	3号墳石室平面図	37
第17図	1号墳墳丘遺存状況図	20	第35図	3号墳墓道内遺物出土状況図	38
第18図	1号墳石室平面図	21	第36図	3号墳遺物出土状況図	39

第37図	3号墳出土装身具実測図①	40	第89図	10号墳出土鉄製品実測図	93
第38図	3号墳出土装身具実測図②	41	第90図	10号墳出土土器実測図	95
第39図	3号墳出土装身具実測図③	42	第91図	11号墳墳丘遺存状況図	97
第40図	3号墳出土鉄製品実測図	42	第92図	11号墳石室平面図	98
第41図	3号墳出土土器実測図①	45	第93図	11号墳石室内遺物出土状況図	99
第42図	3号墳出土土器実測図②	46	第94図	11号墳遺物出土状況図	99
第43図	3号墳出土土器実測図③	47	第95図	11号墳出土装身具実測図	100
第44図	3号墳出土土器実測図④	48	第96図	11号墳出土鉄製品実測図	101
第45図	3号墳出土土器実測図⑤	49	第97図	11号墳出土土器実測図	102
第46図	4号墳墳丘遺存状況図	52	第98図	12号墳墳丘遺存状況図	104
第47図	4号墳石室平面図	54	第99図	12号墳石室平面図	105
第48図	4号墳遺物出土状況図	55, 56	第100図	12号墳石室内遺物出土状況図	106
第49図	4号墳出土鉄製品実測図	57	第101図	12号墳遺物出土状況図	106
第50図	4号墳出土耳環実測図	57	第102図	12号墳出土鉄製品実測図	106
第51図	4号墳出土馬具実測図	57	第103図	12号墳出土装身具実測図	107
第52図	4号墳出土石製品実測図	58	第104図	12号墳出土土器実測図	109
第53図	4号墳出土土器実測図①	59	第105図	梅ヶ崎古墳群調査区設定図	113
第54図	4号墳出土土器実測図②	60	第106図	1号墳石室平面図	114
第55図	4号墳出土土器実測図③	61	第107図	1号墳出土装身具実測図	115
第56図	5号墳墳丘遺存状況図	63	第108図	1号墳出土鉄鏃実測図	116
第57図	5号墳石室平面図	64	第109図	1号墳出土土器実測図	116
第58図	5号墳出土土器実測図	65	第110図	2号墳石室平面図	117
第59図	5号墳出土鉄製品実測図	65	第111図	2号墳遺物出土状況図	117
第60図	5号墳出土耳環実測図	65	第112図	2号墳出土土器実測図	118
第61図	6号墳石室平面図	66	第113図	2号墳出土耳環実測図	118
第62図	6号墳出土装身具実測図	67	第114図	2号墳出土鉄製品実測図	118
第63図	6号墳出土鉄製品実測図	69	第115図	2号墳出土馬具実測図	119
第64図	6号墳出土土器実測図	69	第116図	3号墳墳丘遺存状況図	120
第65図	7号墳墳丘遺存状況図	70	第117図	3号墳石室平面図	121
第66図	7号墳石室平面図	71	第118図	3号墳遺物出土状況図	122
第67図	7号墳出土土器実測図	71	第119図	3号墳出土装身具実測図	122
第68図	8号墳墳丘遺存状況図	72	第120図	3号墳出土土器実測図	123
第69図	8号墳石室平面図	73	第121図	4号墳石室平面図	124
第70図	8号墳石室内遺物出土状況図	74	第122図	5号墳石室平面図	125
第71図	8号墳出土土器実測図	75	第123図	5号墳石室内遺物出土状況図	125
第72図	8号墳出土装身具実測図	76	第124図	5号墳出土土器実測図	126
第73図	8号墳出土鉄製品実測図	77	第125図	出土石器・石製品実測図	127
第74図	8号墳出土馬具実測図	77	第126図	調査区設定図	129
第75図	9号墳墳丘遺存状況図	79	第127図	第3期経塚地形測量図	130
第76図	9号墳石室平面図	79	第128図	トレンチ設定図	131, 132
第77図	9号墳石室内遺物出土状況図	80	第129図	トレンチ土層断面図	131, 132
第78図	9号墳遺物出土状況図①	81	第130図	経塚平面図・立面図	133
第79図	9号墳遺物出土状況図②	82	第131図	祭壇状積石平面図・立面図	134
第80図	9号墳出土鉄製品実測図	82	第132図	第2期経塚平面図・立面図	135, 136
第81図	9号墳出土装身具実測図①	83	第133図	第1期経塚平面図・立面図	137, 138
第82図	9号墳出土装身具実測図②	84	第134図	経石出土状況図	140
第83図	9号墳出土土器実測図①	86	第135図	円形列石平面図	141, 142
第84図	9号墳出土土器実測図②	87	第136図	出土経石実測図	144
第85図	10号墳墳丘遺存状況図	90	第137図	瓦拓影・実測図	145
第86図	10号墳石室平面図	91	第138図	出土土器・鉄製品・石製品実測図および銭拓影	146
第87図	10号墳石室内遺物出土状況図	92	第139図	竪穴系横口式石室の分布	147
第88図	10号墳出土装身具実測図	92			

## 図 版 目 次

- 図版 1 浦辺・大浦・梅ヶ崎古墳群遠景 浦辺古墳群遠景 浦辺古墳群全景 1号墳完掘 1号墳墳丘  
図版 2 1号墳羨道部遺物出土状況① 1号墳羨道部遺物出土状況② 1号墳玄室内敷石  
1号墳石室完掘 2号墳調査前 2号墳完掘 3号墳調査前 3号墳墳丘  
図版 3 1号墳出土遺物①  
図版 4 1号墳出土遺物②  
図版 5 1号墳出土遺物③  
図版 6 2号墳出土遺物  
図版 7 大浦古墳群遠景 大浦古墳群全景 大浦古墳群 I 地区全景  
図版 8 1号墳調査前 1号墳全景 1号墳墳丘 1号墳西側周溝部遺物出土状況① 1号墳西側周  
溝部遺物出土状況② 1号墳玄門閉塞 1号墳玄門閉塞除去後 1号墳石室完掘  
図版 9 2号墳調査前 2号墳全景 2号墳墳丘 2号墳西側周溝部遺物出土状況  
2号墳玄室内管玉出土状況 2号墳玄門閉塞 2号墳玄門閉塞除去後 2号墳石室完掘  
図版10 3号墳調査前 3号墳全景 3号墳墳丘 3号墳周溝部遺物出土状況 3号墳供献土器出  
土状況 3号墳羨道部遺物出土状況 3号墳玄室内小玉出土状況 3号墳石室完掘  
図版11 4号墳調査前 4号墳全景 4号墳墳丘 4号墳北側周溝部遺物出土状況  
4号墳玄門閉塞 4号墳玄門閉塞除去後 4号墳玄室内遺物出土状況 4号墳石室完掘  
図版12 5号墳調査前 5号墳全景 5号墳墳丘 5号墳玄室内提瓶出土状況  
5号墳玄室内耳環出土状況 5号墳玄室内敷石 5号墳玄門閉塞 5号墳石室完掘  
図版13 6号墳調査前 6号墳全景 6号墳石室完掘 7号墳調査前 7号墳墳丘  
7号墳玄門閉塞 7号墳玄門閉塞除去後 7号墳石室完掘  
図版14 8号墳調査前 8号墳全景 8号墳前室内遺物出土状況 8号墳玄室内雁木玉出土状況  
8号墳西側墳丘裾部遺物出土状況 8号墳玄室内馬具出土状況 8号墳東側列石  
8号墳石室完掘  
図版15 大浦古墳群 II 地区全景 9号墳調査前 9号墳全景 9号墳墳丘  
9号墳西側周溝部・東側墓道遺物出土状況  
図版16 9号墳墓道遺物出土状況 9号墳玄門閉塞 9号墳玄門閉塞除去後 9号墳石室完掘  
10号墳調査前 10号墳全景 10号墳墳丘 10号墳玄門閉塞  
図版17 10号墳玄室内鉄鏃出土状況 10号墳石室完掘 11号墳調査前 11号墳全景 11号墳墳丘  
11号墳玄室内砂礫層検出状況 11号墳玄門閉塞 11号墳玄門閉塞除去後  
図版18 11号墳開口部東側遺物出土状況 12号墳調査前 12号墳全景 12号墳墳丘  
12号墳開口部東側供献土器出土状況 12号墳玄室内遺物出土状況 12号墳玄室内敷石  
12号墳前室内排水溝  
図版19 1号墳出土遺物①  
図版20 1号墳出土遺物②  
図版21 2号墳出土遺物①  
図版22 2号墳出土遺物②  
図版23 3号墳出土遺物①  
図版24 3号墳出土遺物②  
図版25 3号墳出土遺物③  
図版26 3号墳出土遺物④  
図版27 4号墳出土遺物①  
図版28 4号墳出土遺物②  
図版29 4号墳出土遺物③  
図版30 5号墳出土遺物 6号墳出土遺物  
図版31 7号墳出土遺物 8号墳出土遺物①  
図版32 8号墳出土遺物②  
図版33 9号墳出土遺物①  
図版34 9号墳出土遺物②  
図版35 9号墳出土遺物③  
図版36 10号墳出土遺物①  
図版37 10号墳出土遺物②  
図版38 11号墳出土遺物  
図版39 12号墳出土遺物①  
図版40 12号墳出土遺物②  
図版41 1号墳調査前 1号墳崩落石出土状況 1号墳石室完掘 1号墳玄門閉塞 1号墳玄室内管  
玉出土状況 1号墳玄室内耳環出土状況 2号墳石室完掘 2号墳玄室内耳環出土状況

図版42	2号墳羨道内馬具出土状況 2号墳玄室内鏝出土状況 2号墳開口部遺物出土状況 2号墳供献土器出土状況 3号墳崩落石出土状況 3号墳玄室内敷石 3号墳石室完掘 3号墳玄室内切子玉出土状況
図版43	3号墳玄室内遺物出土状況 3号墳西側土器出土状況 4号墳玄室内敷石 4号墳石室完掘 5号墳玄室内遺物出土状況 5号墳玄室内高坏出土状況① 5号墳玄室内高坏出土状況② 5号墳石室完掘
図版44	1号墳出土遺物 2号墳出土遺物①
図版45	2号墳出土遺物② 3号墳出土遺物①
図版46	3号墳出土遺物② 5号墳出土遺物 出土石製品
図版47	小郡開作経塚を火の山から望む 経塚近景 第3期経塚 安全祈願祭
図版48	経塔東面(奉納大乘妙典塚) 経塔南面 第2期経塚 第2期経塚積石部 東側瓦敷面検出 状況 北西隅瓦敷面検出状況
図版49	祭壇状積石 土師器皿検出状況 銅銭検出状況 調査区拡張 第1期経塚 写真測量風景
図版50	円形列石出土状況 経石出土状況 経石検出作業風景 土師器皿出土状況 杭検出状況 木片検出状況 最終トレンチ完掘状況
図版51	出土経石
図版52	出土遺物

## 表 目 次

第1表	1号墳出土鉄鏝計測表	9	第29表	8号墳出土小玉計測表	76
第2表	1号墳出土耳環計測表	10	第30表	9号墳出土耳環計測表	82
第3表	1号墳出土土器観察表①	12	第31表	9号墳出土小玉計測表①	84
第4表	1号墳出土土器観察表②	13	第32表	9号墳出土小玉計測表②	85
第5表	2号墳出土鉄鏝計測表	15	第33表	9号墳出土土器観察表①	88
第6表	2号墳出土小玉計測表	16	第34表	9号墳出土土器観察表②	89
第7表	浦辺古墳群古墳一覧表	18	第35表	10号墳出土小玉計測表	92
第8表	1号墳出土鉄鏝計測表	23	第36表	10号墳出土鉄鏝計測表	94
第9表	1号墳出土小玉計測表	24	第37表	10号墳出土土器観察表	96
第10表	1号墳出土土器観察表①	26	第38表	11号墳出土小玉計測表	100
第11表	1号墳出土土器観察表②	27	第39表	11号墳出土鉄鏝計測表	101
第12表	2号墳出土耳環計測表	29	第40表	11号墳出土土器観察表	103
第13表	2号墳出土管玉計測表	29	第41表	12号墳出土耳環計測表	108
第14表	2号墳出土小玉計測表①	30	第42表	12号墳出土管玉計測表	108
第15表	2号墳出土小玉計測表②	33	第43表	12号墳出土小玉計測表	108
第16表	2号墳出土土器観察表	35	第44表	12号墳出土土器観察表	110
第17表	3号墳出土鉄鏝計測表	42	第45表	大浦古墳群古墳一覧表	111
第18表	3号墳出土小玉計測表①	43	第46表	1号墳出土耳環計測表	115
第19表	3号墳出土小玉計測表②	44	第47表	1号墳出土小玉類計測表	115
第20表	3号墳出土土器観察表①	49	第48表	1号墳出土鉄鏝計測表	116
第21表	3号墳出土土器観察表②	50	第49表	2号墳出土鉄鏝計測表	118
第22表	3号墳出土土器観察表③	51	第50表	3号墳出土管玉計測表	122
第23表	4号墳出土鉄鏝計測表	57	第51表	3号墳出土小玉計測表	122
第24表	4号墳出土土器観察表①	61	第52表	梅ヶ崎古墳群古墳一覧表	128
第25表	4号墳出土土器観察表②	62	第53表	浦辺古墳群・大浦古墳群・ 梅ヶ崎古墳群出土土器編年表	147
第26表	6号墳出土小玉計測表	68			
第27表	8号墳出土土器観察表	75	第54表	大浦古墳群・梅ヶ崎古墳群 供献土器分類表	148
第28表	8号墳出土耳環計測表	76			

## 第1章 遺跡の位置と環境

国道2号線小郡バイパスを防府方面に走行し、左車窓に新幹線小郡駅が見える辺りになると、右手に山口県総合交通センター、さらにその遠方にらくだの背を連ねたような山塊が目に入ってくる。北から陶ヶ岳、火の山、亀山と続くこの火の山山塊は休日にはハイカーで賑わい、中でも中央に位置する火の山(303m)からは、山口湾口の東西に連なる海岸線を眼下に一望できるのはもちろん、天気恵まれると幸崎と藤尾山に跨る周防大橋の遙か彼方に、遠く国東半島を眺めることも可能である。

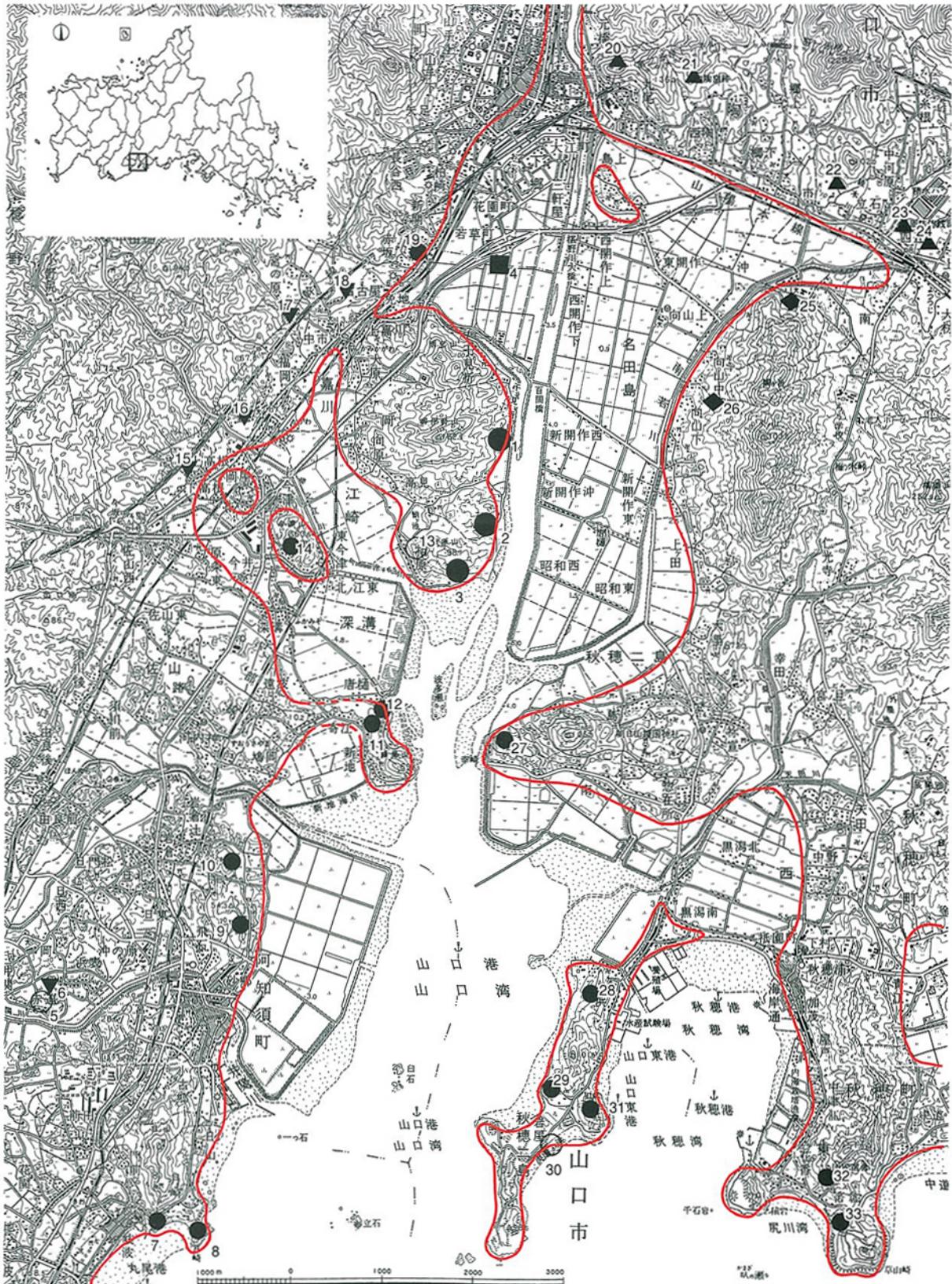
ところで、火の山山頂から目を西北方向に転ずると、新幹線小郡駅の南側から樫野川の河口一帯にかけて、高い堤防に囲まれた水田地帯が広がっているのが見える。一帯の海拔標高はいずれも2m以下と低く、近世以前は山口湾の一部であった。古代海進期には現在より海水面が5～6m上昇したとの推定があり、実際、樫野川東岸河口の山口市名田島及び秋穂二島地区には、「沖」「島」「二島」「小島」などの地名が点在し、「東開作」「西開作」「新開作」「昭和開作」などという地名と共に、地域の歴史を各所の地名に探ることができる。さらに樫野川西岸の「小郡開作」もその開発の初めは近世初頭に遡り、小郡開作経塚は「小郡開作」のほぼ中央部、交通センターの西隣に位置している。

一方、山口湾西岸の御伊勢山、相原山の山塊とその西方の今津山、南方の藤尾山は、対岸の火の山山塊と共に、中生代に日本列島の原型を造ったマグマの活動により形成された周南層群(黒雲母花崗岩)の一部で、これらは洪積世には沈水して島嶼群を形成していたが、沖積世に至り陸繋島となったものである。今も典型的な陸繋島の状態を見せる山口湾東南口の長浜、岩屋を含めたこれらの旧島嶼群には、御伊勢山の東麓、南麓と相原山南麓に展開する浦辺、大浦、梅ヶ崎の各古墳群を含めて、多数の古墳が点在していることが知られている。しかし、古墳数に対するこの地域の同時代の他の遺跡は、時代を遡る弥生期を含めて極めて少ない。これは、前述した通り山口湾岸の陸地の大部分が花崗岩層の隆起により形成されており、農業生産の適地としての沖積低地はほとんど見られないためである。それゆえ旧山口湾岸の古代以前の遺跡は、旧石器、縄文時代及び古墳時代終末期の複合遺跡として有名な美濃ヶ浜遺跡に代表される数例の旧石器発見地と、潟上及び向山近辺などの縄文後期の遺跡が報告されているだけにすぎない。しかも、美濃ヶ浜遺跡で確認された古墳時代終末期の集落跡も、製塩集団に伴うものであり、農耕を基盤とする集団のものではないことが明らかにされている。

ちなみに、この地域の古墳の中で最も古いとされるのは、山口湾口西側の藤尾山、猫山の両古墳である。共に4世紀末から5世紀初頭に比定される壺型埴輪を出土したにも関わらず、そろって主体部を持たない点に大きな特異性がある。続いて5世紀前半には、円筒埴輪を有し同時期では県下最大規模の円墳である浄福寺古墳が湾の北縁に営まれ、中葉には、箱式石棺を内部主体とし、変形獣帯鏡と鉄器が出土した兜山古墳が湾の南端で築造されている。この2つの古墳はいずれも当該地域の有力首長の墓と思われる。そして、6世紀代に入ると、浦辺、大浦、梅ヶ崎を初めとする群集墳が湾岸の各地に造営されることになるが、同時代の美濃ヶ浜製塩遺跡に隣接する兜山古墳群や揺木山古墳群はともかく、集団の生産基盤が明らかではない古墳群が多く、被葬者の性格に興味がそそられるところである。

古代に入ると、須恵器の古窯群や鑄銭司に代表される大規模な生産遺跡が湾の北側の山陽道縁辺に展開することになり、その後も山陽道沿いに、古代から中世にかけての集落跡が営まれることになるが、相変わらずこの地域の本格的な農業生産は、近世以降の干拓による新田開作を待たねばならなかった。





1. 浦辺古墳群 2. 大浦古墳群 3. 梅ヶ崎古墳群 4. 小郡開作経塚 5. 赤迫遺跡 6. 神正遺跡 7. 若宮古墳群 8. 月崎古墳群 9. 丸塚古墳1号墳 10. 丸塚古墳群(2～5号墳) 11. 藤尾山古墳 12. 猫山古墳 13. 相原遺跡 14. 今津山古墳 15. 高根遺跡 16. 中塚遺跡 17. 上嘉川遺跡 18. 稽古屋遺跡 19. 浄福寺古墳 20. 陶古窯跡群百谷支群 21. 陶窯跡 22. 鑄銭坊遺跡 23. 周防鑄銭司遺跡 24. 東禅寺・黒山遺跡 25. 湧上遺跡 26. 向山遺跡 27. 幸崎古墳群 28. 長浜古墳 29. 兜山古墳群 30. 美濃ヶ浜遺跡 31. 揺木山古墳群 32. 尻川古墳 33. 筈倉古墳

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡(赤線は旧海岸線)

## 第2章 調査に至る経緯と調査の概要

山口県は、吉敷郡阿知須町の阿知須干拓地で西暦2001年（平成13年）開催予定の『21世紀未来博』へのアクセス道として、また国道190号の交通渋滞緩和のため、一般県道山口阿知須宇部線を建設する運びとなった。工事区域内には、周知の遺跡である山口市大字嘉川所在の浦辺古墳群、同市大字江崎所在の大浦古墳群、梅ヶ崎古墳群、小郡町下郷所在の小郡開作経塚が含まれるため、山口県山口土木建築事務所から調査依頼を受けた財団法人山口県教育財団は、平成7年、計画地区内の予備調査を行った。その結果、合計6基の古墳の存在が確認され、事前の発掘調査を実施することになった。

### 1. 平成8年度調査

財団法人山口県教育財団は、平成8年4月16日から浦辺古墳群の発掘調査に着手した。浦辺古墳群は、樫野川河口に近い標高183mの御伊勢山から東に延びる細長い尾根の南斜面に位置し、標高約21～25mである。3基の古墳のうち1基は、石室が工事予定範囲外であったため墳丘実測のみを行った。古墳は傾斜地に築造されていたため、調査区の端に沿って土砂の流失防止用の土嚢を設置してから、主軸に沿ってトレンチを設定し、石室の状況、墳丘の規模・形状、盛土の状態などを確認した。墳丘付近は一面の竹林で、その切り株の除去には大変な苦勞を強いられた。さらに、石室内には大きな崩落石があり、造園業者に委託しそれらの石材を除去した。

大浦古墳群は、浦辺古墳群より約800mほど樫野川の河口寄りの低い尾根上に位置し、標高約15～29mである。7月29日から発掘調査を開始した。調査を進めていく過程において、後世の削平によって墳丘が失われ、予備調査では確認できなかった古墳が新たに発見された。10月初旬には調査区内の最上部で2基、また12月中旬には3基の古墳が相次いで発見された。そのため協議の結果、平成8年度中にそのうち2基の調査を行い、残りの古墳については次年度に調査を行うこととなった。

### 2. 平成9年度調査

発掘調査は、平成9年4月15日から平成9年12月26日まで実施した。

調査対象は、大浦古墳群7基と梅ヶ崎古墳群3



安全祈願祭



石材除去



切株除去

基、そして小郡開作経塚である。大浦古墳群と梅ヶ崎古墳群の調査は、同時進行で行った。

本年度の大浦古墳群の調査は、古墳のすぐ近くまで近代の土砂採取跡の急な崖面や自然崩落した箇所が多くあり、一輪車による排土の運搬には大変気を使い、後半からはベルトコンベアも利用した。また、板や土嚢を使って土砂の調査区外への流失防止にも万全を期した。梅ヶ崎古墳群は、正面に周防大橋や山口湾につながる穏やかな入り江を望む、大変景観の良い丘陵上に位置している。ただ、調査区内の全ての古墳が、後世の攪乱を受けたり石材の抜き取りに合うなど、築造時の状態を留めているものではなく、墳丘の遺存状況は極めて悪かった。調査中、段々畑の中から新たに2基発見され、合計5基の古墳の調査を行った。また、3基の古墳の石室内には大型の崩落石があり、造園業者に委託しその除去を行った。



石室内掘込



空中撮影



現地説明会

古墳の調査と並行して、9月22日から小郡開作経塚の調査にも着手した。山口県総合交通センター前の水田の中に祭られていた石塔を中心にトレンチを開け、掘り下げたところ、現基壇の下から古い段階の基壇や、多量の瓦片、円形列石遺構、約8000点の経石などが見つかった。また、トレンチを延長するため、重機を入れて塚の高まりを囲っていたコンクリートブロック塀の除去を行った。この地点は、海拔約0.5～2.4mの高さにあるため、地中から絶えず水が湧き、ポンプで排水しながらの作業となった。さらに、11月25日には大雨により調査区全体が水没するというアクシデントもあったが、11月27日には委託業者による積石の写真測量を無事終了した。

大浦古墳群、梅ヶ崎古墳群並びに小郡開作経塚の調査がほぼ終わりに近づいた12月9日に遺跡全体の空中撮影を行い、12月26日には器材を撤収し、2年間にわたる現地での調査を全て終了した。

なお、12月13日には、大浦古墳群で調査した12基の古墳を公開し、現地説明会を開催したところ、地元の方々を中心に約100名の熱心な見学者が訪れた。古墳群の中を実際に歩いて見学し、築造当時の様子を思い浮かべて感銘を受けている様子であった。

その後、山口県埋蔵文化財センターにおいて調査資料を整理し、出土遺物の復元・実測を行い、この報告書を刊行するに至った。

# 浦 辺 古 墳 群

## 第3章 調査の成果

### 第1節 浦辺古墳群

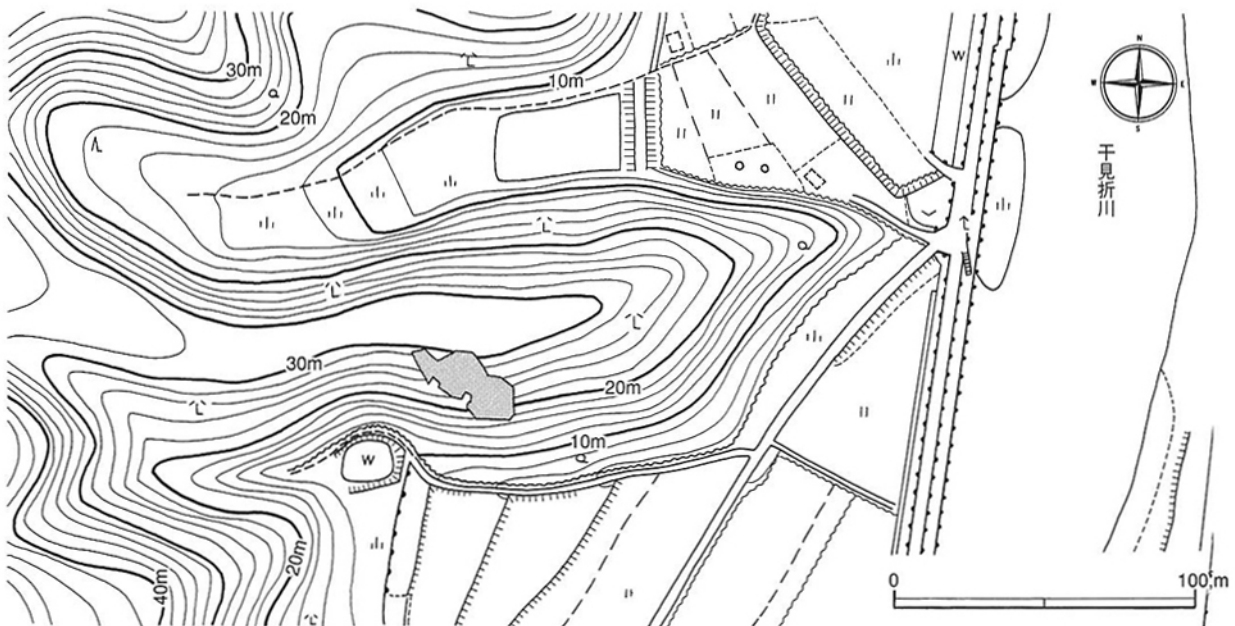
浦辺古墳群は、御伊勢山（標高182.9m）から東に派生する尾根の南斜面に位置する。調査を実施した3基の古墳を含め、計6基の古墳からなる古墳群である。それらは全て標高25m前後に築造されており、開口方向が確認できる古墳は全て南に向かって開口している。

当時は、眼下に深く入り込んだ山口湾が、眼前には幸崎古墳群がある二島の半島、若しくは、島が望めていたと思われる。

尾根の先端部に築造された1基を除いて、他の古墳は南斜面に築造されており、墳丘が重ならないように、ほぼ等間隔に配列されている。それら古墳の前面（南側）には、段々畑の痕跡が残っており、古墳の中には、畑を構築する際に墳丘の開口部側が削り取られた古墳もある。

調査を行った古墳を含め、その周辺の古墳の中には、石材を抜き取られ、石室上面が大きく陥没した古墳が数基みられる。それら抜き取った石材は、古墳周辺では確認されないことや、地元で畑の開墾や周辺の干拓をする際に周辺の尾根から、たくさんの石を引き出し利用したという伝聞があることなどから、近世以降、石材利用目的に古墳が攪乱されたことは、まず間違いないであろう。実際に古墳群前面の段々畑の傾斜面には、古墳を構成していたと推測される石材が使われている。

また、古墳群の斜面上位側、尾根頂部にある程度の広さで平坦面がみられる。工事予定範囲外であるため、遺構の確認等は行っていないが、表層で中世の土器片が採取されている。加えて、調査を行った3号墳の墳丘裾部には、地山の傾斜に係わらず、堆積土が厚く残っており、それら堆積土の中には、明らかに地山を削って造成したと思われる層序も確認できた。以上のことから中世に、尾根頂部に何らかの人的行為が施されていると推測される。



第2図 浦辺古墳群調査区設定図 (S=1/2500)

# 1. 1号墳

## (1) 調査前の状況

1号墳は調査区の南東に位置し、標高は23mである。北西に2号墳が隣接する。調査前は、わずかに墳丘の高まりも認められ、墳丘の中央部に攪乱坑と崩落した石材が確認された。

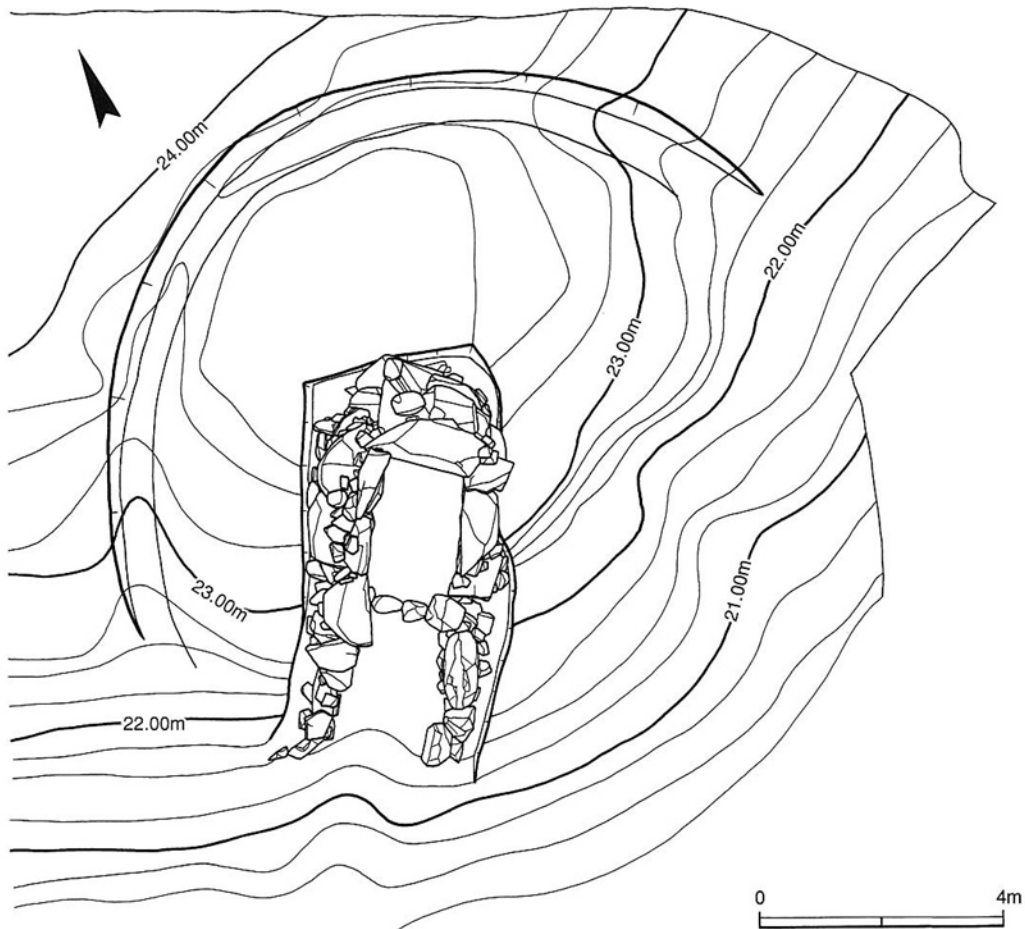
## (2) 墳丘

墳丘は、墳頂部と墳丘の南側については後世の削平により消失していたが、斜面高位の北側については、比較的遺存状況が良好であった。トレンチ調査による土層観察から、直径11.2×11.6mのほぼ円形の墳丘であったと思われる。

また、北西に隣接する2号墳との関係は、2号墳の墳丘裾部に堆積した層から1号墳の周溝を掘り込んでおり、2号墳に比べ1号墳の方が後に築造されたことが明らかになった。

古墳の基本的な築造方法は、土層観察から、まず、斜面上位の地山整形を行い、斜面下位側に盛土をする。次に、墓坑を掘り込み、石室を構築しながら水平に盛土を行い、石室が完成した時点で墳丘の形を整え1次墳丘を完成させる。最後に周溝を掘り込み、最終墳丘を構築し、完成させたものと推定される。

周溝は、斜面上位側で検出された。検出された周溝の形や、斜面を利用して築造している古墳の一般的な例から推測すると、形状は馬蹄形であった可能性が高い。周溝の規模は、幅1.0～1.2m、深さ0.2～0.3mを測り、断面形は浅い皿状を呈す。



第3図 1号墳墳丘遺存状況図 (S=1/125)

### (3) 石室

内部主体は、ほぼ南に開口する両袖式の横穴式石室である。主軸はN23°Eを示す。長方形の玄室に同じ幅の羨道が付設する形状で、石室全長は6.6mを測る。

石室内には、天井石や側壁の一部が崩落しており、土砂も流入し、竹による攪乱もうけていた。

墓坑は、地山から掘り込んでおり、斜面上位で深さ1.7mを測る。形状は不整形な長方形で、羨道端部付近で消滅する。

**玄室** 平面形は、ほぼ長方形で、幅1.8m、右壁長2.8m、左壁長2.7m、玄室高1.6mを測る。

床面を約20cm掘り込んで掘り方とし、奥壁には1.4×1.2mと1.2×0.5mの2石を縦長に用い、内面をやや内傾させて、鏡石としている。側壁には、床面高約0.8mでほぼ水平を保つように、板石を横長に用い、左右それぞれ3石で腰石としている。

その上部には、1.2×0.4m、奥行0.8m程度のやや扁平な石材を小口に積み上げ、間に小石を詰め壁体を構築している。

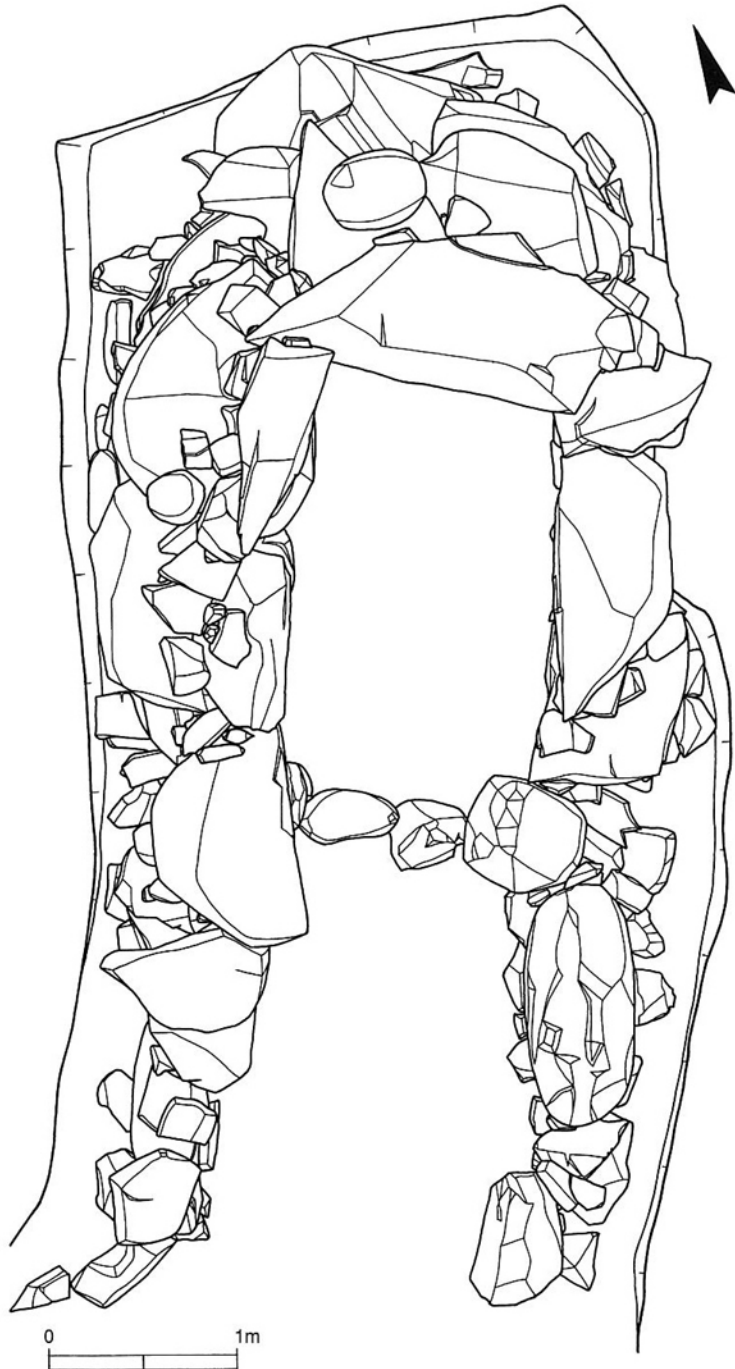
ただ、右壁側はほぼ垂直に壁体を構築しているのに対して、左壁側は持ち送って壁体が構築されている。これは、左壁側が斜面高位であるため、墳丘盛土の土圧に関係する可能性もある。

天井石が1石残っており、2.0×0.8×0.9mを測る。

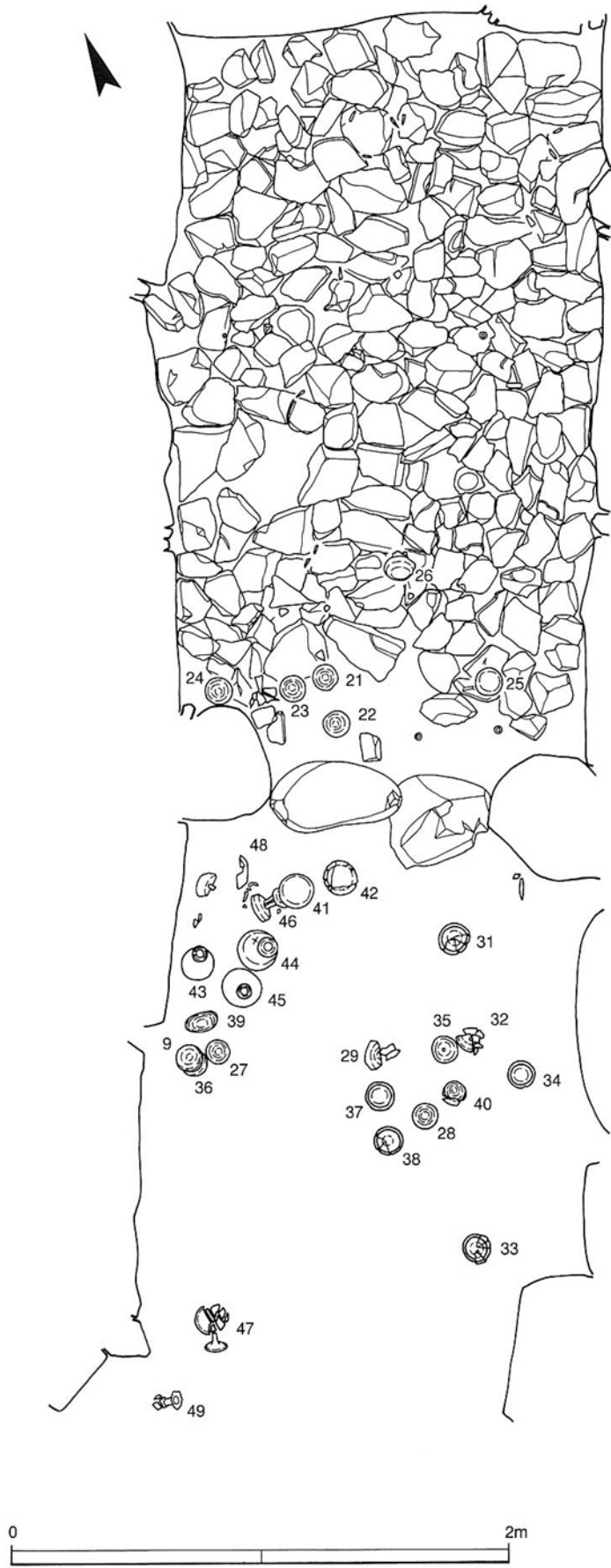
玄門は、左右に約1.1mの石材を縦長に用い袖石とし、幅0.9mの間に塊石を2個並べ框石としている。

**羨道** 壁体の構築方法はほぼ玄室と同様で、長さ2.9m、幅1.6m、残存高は右壁側で0.5m、左壁側で1.6mを測る。

特に左壁の羨道端部が外側に開いており、墓坑の掘り方も同様に開いていることから、墓道が開口部から西側に続いていたと推定される。



第4図 1号墳石室平面図 (S=1/40)



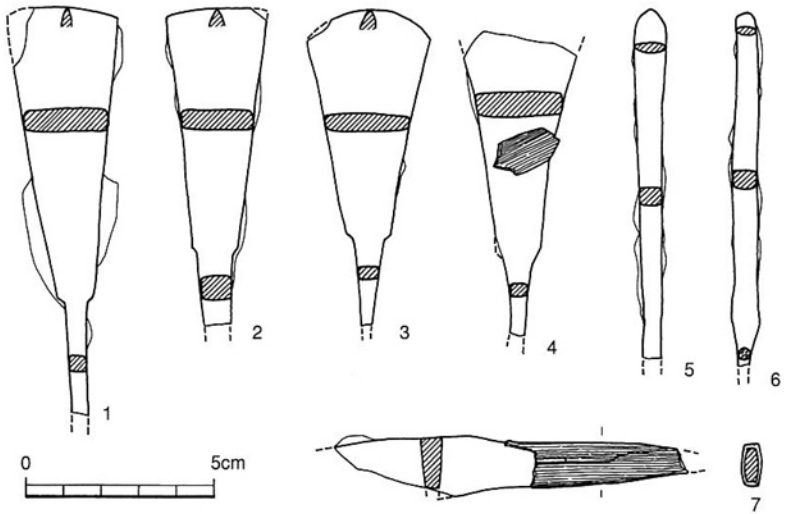
第5図 1号墳石室内遺物出土状況図 (S=3/80)



床面には、敷石が施されており、長径が40cm前後の角石が使用されている。

(4) 遺物

**出土状況** 玄室内には、鉄製品や装身具が散乱して出土しており、特に玄門側の敷石がない部分を中心に、6世紀後半に比定される土器が6点、耳環が2点、鉄鏃、馬具などが数点まとめて出土した。



第6図 1号墳出土鉄製品実測図 (S=1/2)

第1表 1号墳出土鉄鏃計測表

( )は残存値 単位はcm

挿図	図版	出土位置	全長	身部		筈被部		茎部		備考
				長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅	
6-1	3-1	玄室内	(10.8)	7.9	(2.7)	—	—	(2.3)	0.5	方頭式 茎部欠損
6-2	3-2	玄室内	( 8.5)	6.5	2.8	—	—	(2.0)	0.8	方頭式 茎部欠損
6-3	3-3	玄室内	( 8.5)	6.2	3.3	—	—	(2.3)	0.5	方頭式 茎部欠損
6-4	3-4	玄室内	( 8.1)	(6.2)	(3.0)	—	—	(1.9)	0.5	方頭式 刃部・茎部欠損 木質
6-5	3-5	玄室内	( 9.3)	8.3	0.8	(1.0)	0.5	—	—	鑿箭式 筈被部欠損

その部分に敷石がないことについては、意図的な行為によるものか否かは不明である。

羨道内には、左壁側に一群、右壁側に一群の土器群があり、開口部付近にも、高坏が2点出土している。左壁側の一群については、7世紀初頭に比定される土器群が中心で、中には据え置かれた状態で出土した土器もみられた。この一群には7世紀後半に比定される高台付きの坏身が2点含まれていた。右壁側の一群は、7世紀中頃の宝珠つまみ付きの坏蓋を中心とする一群である。こうした出土状況からみると、少なくとも3回以上にわたって追葬がなされたものと推定される。

その他周溝内からも若干の土器片が出土した。

**出土遺物**

**鉄製品**

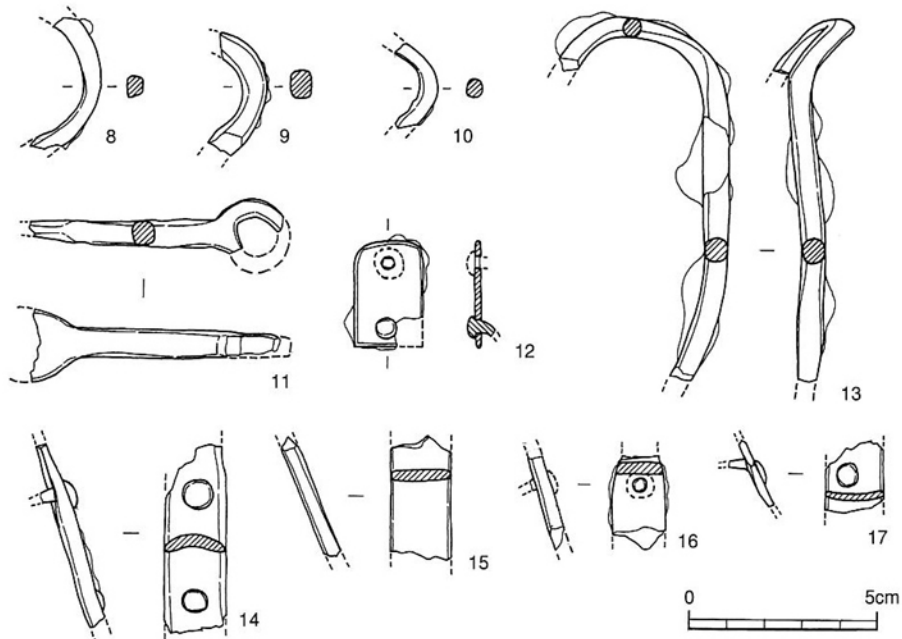
(第6図 図版3)

鉄鏃 (1~6)

計測表を第1表に掲げる。

刀子(7) 緩やかな斜めの両関で、茎部に木質が残る。

残存長9.4cm、うち身部長4.5cm、茎部長4.9cm、身の厚さは0.6cmを測る。



第7図 1号墳出土馬具実測図 (S=1/2)

馬具 (第7図 図版3)

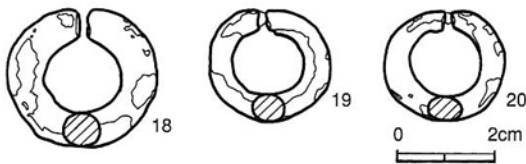
8~10は轡の一部と思われる。11は銜の一部である。

12は革帯端金具。鋌が残る。長さ2.8cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmを測る。

13は鉸具の一部と思われる。

14~17は鐙の一部と思われる。14・16・17には鋌が残る。

耳環 (第8図 図版3) 計測表を第2表に掲げる。



第8図 1号墳出土耳環実測図 (S=2/3)

第2表 1号墳出土耳環計測表

挿図	図版	外法径 (cm) 長径・短径	内法径 (cm) 長径・短径	断面径 (cm) 長径・短径	突合部 (cm) 幅	備考
8-18	3-18	2.96×1.45	1.52×1.45	0.70×0.69	0.15	銅芯
8-19	3-19	2.40×2.23	1.43×1.18	0.63×0.57	—	銅芯
8-20	3-20	2.44×2.20	1.42×1.30	0.69×0.48	—	銅芯

土器 (第9・10図 図版4・5)

坏 (21~25, 27~42, 48) 21・22・25は坏蓋である。23・24は坏身である。ともに須恵器で、玄室内から出土。

27~29は坏蓋である。36~39は坏身で、36・39は大きく焼きひずんでいる。特に、39は意図的に変形させている可能性もある。ともに須恵器で、羨道部左壁側より出土。

21・22、27~29の坏蓋は、全体に丸みをおび、肩に段を有しない。また、口径も11cm前後と小型である。23・24、36~39の坏身は、ほとんど形骸化した短い立ち上がりをもつ。

41・42は高台付坏身である。須恵器で、羨道部左壁側の玄門付近で出土。

30~35は坏蓋である。30は坏身の可能性がある。31~35は宝珠つまみ付坏蓋で、短い返りが付く。40は坏身である。ともに須恵器である。48は土師器の坏身である。羨道部右壁側で出土。

平瓶 (26, 43~45) 26は玄室内から出土。43~45は羨道部左壁側より置かれた状態で出土。ともに須恵器である。

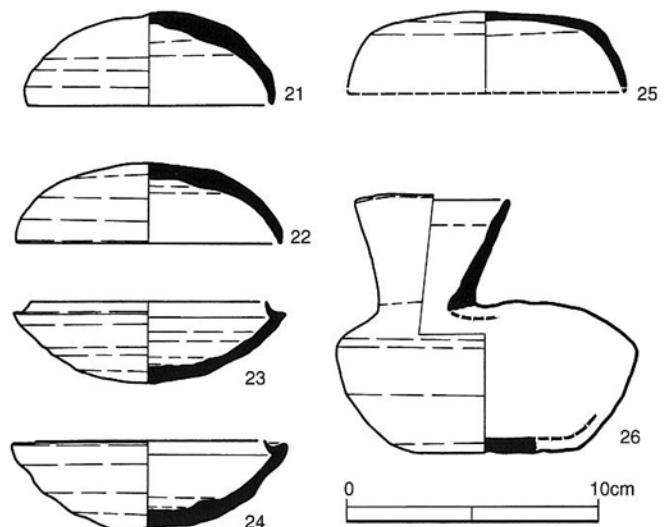
高坏 (46・47・49) 46は須恵器で、羨道部左壁側より出土。脚部に2段2方向の透かしが有る。

47は須恵器である。49は土師器である。

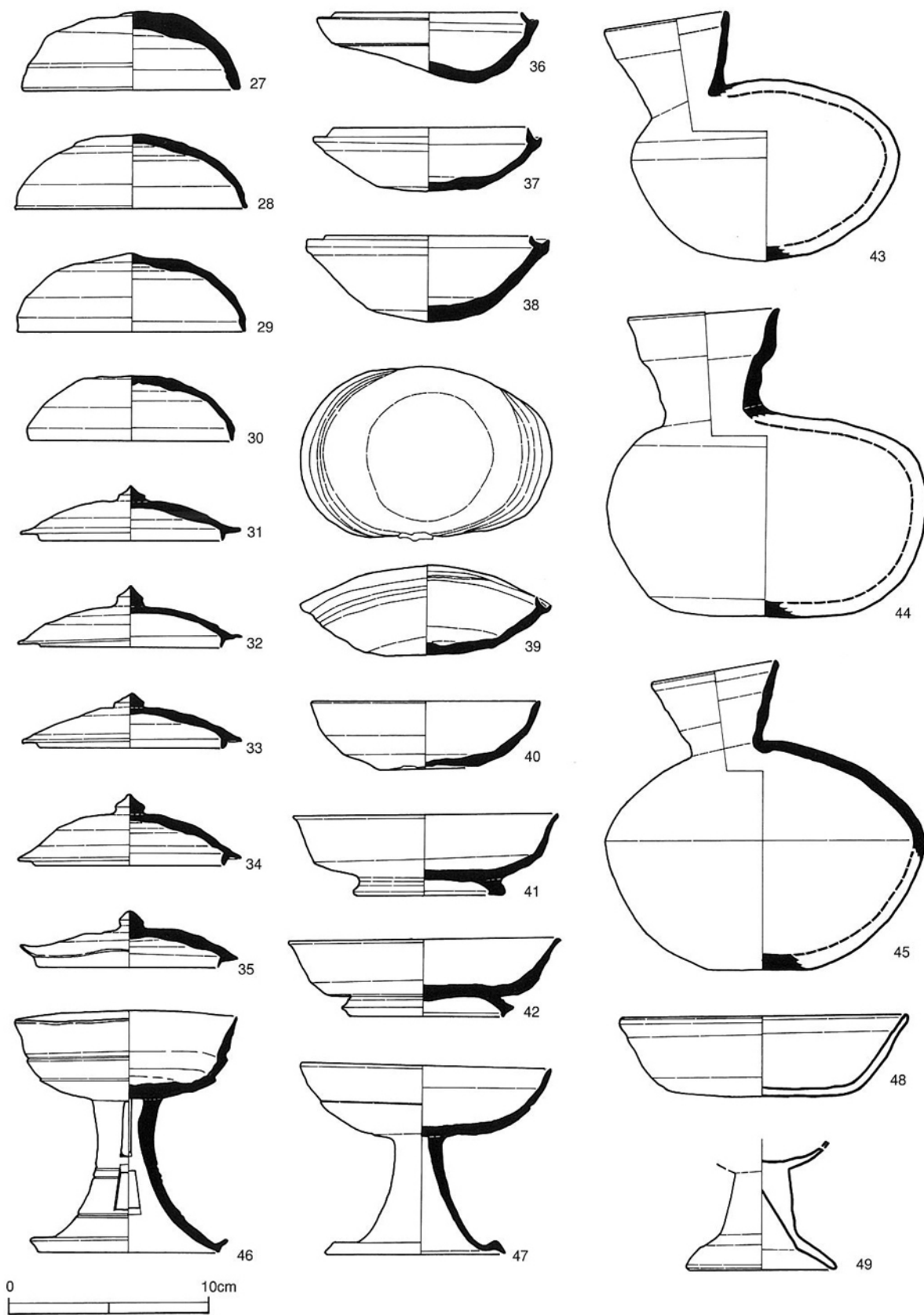
ともに羨道開口部付近より出土。

観察表は第3・4表に掲げる。

(豊島)



第9図 1号墳出土土器実測図① (S=1/3)



第10图 1号墳出土土器実測図② (S=1/3)

第3表 1号墳出土土器観察表①

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
9-21 4-21	坏蓋 須恵器	玄室内	口径 9.7 器高 3.6	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 オリーブ灰色 内 オリーブ灰色	焼きひずみ有り。
9-22 4-22	坏蓋 須恵器	玄室内	口径 10.6 器高 3.2	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	焼きひずみ有り。
9-23 4-23	坏身 須恵器	玄室内	口径 9.4 受部径 10.9 器高 3.2	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
9-24 4-24	坏身 須恵器	玄室内	口径 9.2 受部径 10.7 器高 3.4	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	焼きひずみ有り。
9-25 4-25	坏蓋 土師器	玄室内	口径 (11.0) 器高 (3.0)	器面剥落により、調整不明。	密	不良	外 浅黄橙色 内 浅黄橙色	
9-26 4-26	平瓶 須恵器	玄室内	口径 6.2 体部最大径 11.9 器高 10.2	体部外面底部は、ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 口縁部は貼り付け。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	外面底部に板目状 の圧痕残る。
10-27 5-27	坏蓋 須恵器	羨道部	口径 10.9 器高 4.0	外面天井部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	外面天井部に自然 釉。
10-28 5-28	坏蓋 須恵器	羨道部	口径 11.7 器高 3.7	外面天井部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	不良	外 黄橙色 内 黄橙色	
10-29 5-29	坏蓋 須恵器	羨道部	口径 11.5 器高 3.9	外面天井部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
10-30 5-30	坏蓋 須恵器	羨道部	口径 10.2 器高 3.3	外面天井部は回転ヘラケズリ。内面天井部は静止ナ デ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	粗 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	外面の約2/3に自然 釉。
10-31 5-31	坏蓋 須恵器	羨道部	口径 9.2 受部径 11.0 器高 3.6 ツマミ径 1.3	外面天井部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。 宝珠ツマミはハリツケ。	密	良好	外 明青灰色 内 灰白色	内面に焼きぶくれ。
10-32 5-32	坏蓋 須恵器	羨道部	口径 9.0 受部径 11.2 器高 3.1 ツマミ径 1.3	外面天井部は回転ヘラケズリ。内面天井部は回転ナ デの後静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ左回転。 宝珠ツマミはハリツケ。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	焼きひずみ。
10-33 5-33	坏蓋 須恵器	羨道部	口径 9.1 受部径 11.0 器高 2.8 ツマミ径 1.5	外面天井部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロク ロ右回転。 宝珠ツマミはハリツケ。	密	良好	外 明青灰色 内 灰白色	
10-34 5-34	坏蓋 須恵器	羨道部	口径 9.5 受部径 11.2 器高 3.6 ツマミ径 1.4	外面天井部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロク ロ左回転。 宝珠ツマミはハリツケ。	粗 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	外面全体に自然釉。 外面に粘土附着。
10-35 5-35	坏蓋 須恵器	羨道部	口径 9.0 受部径 10.8 器高 2.8 ツマミ径 1.5	外面天井部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロク ロ右回転。 宝珠ツマミはハリツケ。	密	良好	外 青灰色 内 青灰色	焼きひずみ。
10-36 5-36	坏身 須恵器	羨道部	口径 9.4 受部径 11.0 器高 3.0	外面底部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ 回転方向は不明。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	外面に粘土附着。 自然釉。焼きひず み。
10-37 5-37	坏身 須恵器	羨道部	口径 9.8 受部径 11.6 器高 3.2	外面底部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ 右回転。	密 含砂粒少	不良	外 青灰色 内 灰白色	外面に粘土附着。
10-38 5-38	坏身 須恵器	羨道部	口径 10.4 受部径 12.2 器高 4.3	外面底部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ 右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰白色	外面に粘土附着。 外面に自然釉。
10-39 5-39	坏身 須恵器	羨道部	口径 11.2 受部径 12.6 器高 4.5	外面底部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ 右回転。	密	良好	外 灰色 内 灰白色	焼きひずみ。 外面に粘土附着。 外面に自然釉。
10-40 5-40	坏身 須恵器	羨道部	口径 11.4 器高 3.3	外面底部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ 右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰白色	
10-41 5-41	高台付坏身 須恵器	羨道部	口径 13.3 器高 4.0 台部径 7.6	坏部外面底部は、ヘラケズリ後静止ナデ。他は回転 ナデ。ロクロ右回転。 高台部はベタ高台ハリツケ。	密	良好	外 明青灰色 内 明青灰色	
10-42 5-42	高台付坏身 須恵器	羨道部	口径 13.7 器高 3.9 台部径 7.8	坏部外面底部は、ヘラケズリ後静止ナデ。他は回転 ナデ。ロクロ右回転。 高台部は輪高台ハリツケ。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
10-43 5-43	平瓶 須恵器	羨道部	口径 6.3 体部最大径 13.5 器高 12.5	口縁内外面ともに回転ナデ。体部下位は回転ヘラケ ズリ。体部上位は調整不明。ロクロ右回転。 口縁部はハリツケ。	粗 含砂粒少	良好	外 明青灰色 内 明青灰色	体部上位に自然釉。 体部に焼きぶくれ 有り。

第4表 1号墳出土土器観察表②

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10-44 5-44	平瓶 須恵器	羨道部	口径 7.6 体部最大径 16.1 器高 15.5	体部外面下位は回転ヘラケズリ。体部内面は不明。 他は回転ナデ。ロクロ右回転。 口縁部はハリツケ。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	体部上位に「×」 印のヘラ記号。
10-45 5-45	平瓶 須恵器	羨道部	口径 6.1 体部最大径 16.1 器高 15.6	体部外面下位はヘラケズリ。上位はカキ目後回転ナ デ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
10-46 5-46	高坏 須恵器	羨道部	口径 11.0 器高 11.7 脚部径 9.0	坏部外面底部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 脚部内面にシボリ痕有り。 脚部はハリツケ。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
10-47 5-47	高坏 須恵器	羨道部	口径 12.7 器高 9.5 脚部径 9.1	坏部外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は静止 ナデ。他は回転ナデ。 脚部外面は、回転ヘラケズリ後、ナデ。内面は回転 ヘラケズリ。脚部はハリツケ。	密	良好	外 青灰色 内 青灰色	
10-48 5-48	坏身 土師器	羨道部	口径 14.2 器高 4.0	口縁部内外面はナデ。他は摩滅により不明。	粗	不良	外 赤橙色 内 橙色	
10-49 5-49	高坏 土師器	羨道部	器高 (5.5) 脚部径 7.2	器面剥落につき調整不明。	密	不良	外 明赤褐色 内 明赤褐色	口縁部欠損。

## 2. 2号墳

### (1) 調査前の状況

2号墳は、調査区のほぼ中央に位置し、標高は25mである。南東に1号墳、西に3号墳が隣接する。調査前は竹林で、墳丘の高まりも全く認められず、緩やかな斜面であった。ただ、斜面下位側に天井石と思われる巨石や側壁と思われる石材が点在していた。玄室の位置や主軸方向を確認するため、それら石材の周辺で、まずトレンチ調査を行ったところ、古墳のやや上位の地点で石室の位置を確認することができた。

### (2) 墳丘

墳丘は、後世の削平によりそのほとんどが消失していた。トレンチ調査の結果、北東側に一部周溝が残存しており、その形状から、直径14.8mの円墳であったと推定される。

墳丘の遺存状況が悪く、盛土が最も残存している北西側でも30cm前後といった状況であり、古墳の基本的な築造方法については、明確なことは確認できないが、わずかに残る土層観察から、まず斜面上位を中心に地山整形を行い、墓坑を掘り込み、石室を築いて盛土を行ったと推定される。

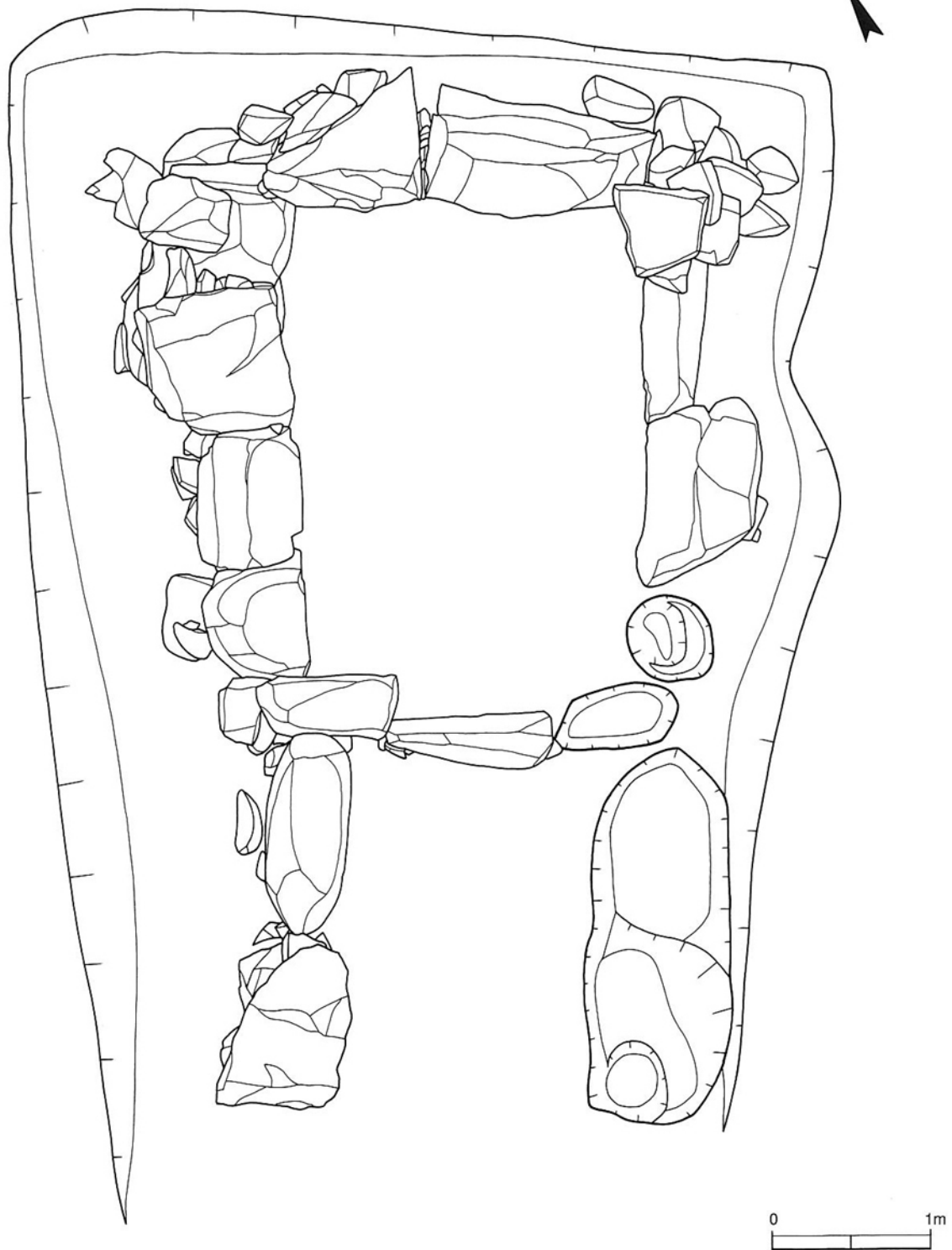
また、南東側には、石材を抜き取った際に掘られたと思われる、約1.7×2.0mの半円形の攪乱坑が確認された。

周溝は、削平のためほとんど検出できなかったが、わずかに残った北東部で、幅1.0～1.5m、深さ0.5m前後で、断面形は浅い皿状を示す。

### (3) 石室

内部主体は南西に開口する両袖の横穴式石室である。ほぼ長方形の玄室に若干狭い羨道を付設した形態で、主軸はN24°Eを示す。石室長は約5.9mを測る。

石室に天井石はすでになく、右壁側は、玄門付近より基部石から抜き取られていた。石室内には小型の石と土砂が充満していたが、側壁、天井石を構成していたとみられる石材はなく、石材採取を目的に攪乱が行われたと推測される。



第11図 2号墳石室平面図 (S=1/40)

また、石室床面の上部約25cmのところ、焼土とその周りに石組みの炉とみられる遺構が検出された。その周辺から出土した土器片から中世の遺構と思われる。

墓坑は、やや変形の長方形で、長径7.6m、短径5.2mで最深部は1.7mを測る。斜面下位側になるほど浅くなり、開口部付近で自然地形に消える。

また、墓坑を掘り込んだ際にでた土砂は、斜面下位側を造成して床面を構築している。

**玄室** 玄室の平面形は羽子板形で、玄室長3.5m、幅は奥壁側で2.5m、玄門側で2.2mを測る。

奥壁は、地山を約10cm掘り窪め、1.9×1.4m、2.2×1.0mの巨大な板石2石を縦長に用い、内面をやや内傾させて置き、鏡石としている。

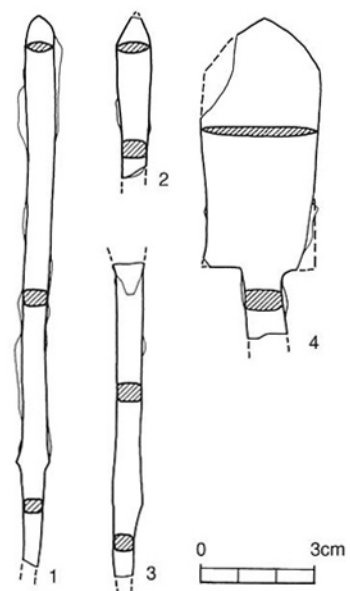
側壁は、右壁側の1石が抜き取られているが、その抜き取り痕から推測すると、奥壁側に1.6×0.8mの石材を横長に用い、1.0×0.8mくらいの石材を2石縦長に用い、計3石で腰石としている。それら基部石は、地山を掘り窪めること無く据え置かれており、厚みのある石材が用いられている。その上部は、やや小型な石材を小口に積み上げているが、石材を整形して、他の石材をかみ合わせるなどの工夫が見られる。

床面は、敷石もなく、かなり攪乱を受けており、盗掘坑らしき床面の窪みも確認できた。

玄門は、右壁側が抜き取られており、左壁側についてみると、高さ1.2mの石材を縦長に用い袖石としている。その間に1石置き、框石としている。右壁の袖石の抜き取り痕から推測すると、玄門幅は約1.0mとみられる。

**羨道** 羨道は、右壁側が基部石まで完全に抜き取られており、その全容は明らかにできないが、左壁が残存する長さ、右壁の抜き取り痕の長さがほぼ同様であることから、羨道長は約2.4mと推定できる。

**排水施設** 羨道のほぼ中央に、框石付近から開口部にかけて排水溝が施されている。幅60cm、深さ20cmを測り、開口部に向かって若干傾斜している。玄室内にこれに続く排水施設が確認されないことから、玄室内の床面の傾斜を利用して玄門付近に集め、この排水溝を利用して石室外に排水していたと思われる。



第12図 2号墳出土鉄製品  
実測図 (S=1/2)

第5表 2号墳出土鉄鏃計測表

( )は残存値 単位はcm

挿図	図版	出土位置	全長	身 部		鏃被部		茎 部		備 考
				長 さ	幅	長 さ	幅	長 さ	幅	
12-1	6-1	玄室内	(14.6)	2.1	0.7	9.9	0.6	(1.6)	0.5	鏃箭式 茎部欠損
12-2	6-2	玄室内	(4.3)	(2.8)	1.0	(1.5)	0.6	—	—	鏃箭式 鏃被部欠損
12-3	6-3	玄室内	(8.4)	—	—	(6.7)	0.6	—	—	身部欠損
12-4	6-4	玄室内	(8.5)	6.7	3.1	(1.8)	1.0	—	—	長三角形式 茎部欠損

#### (4) 遺物

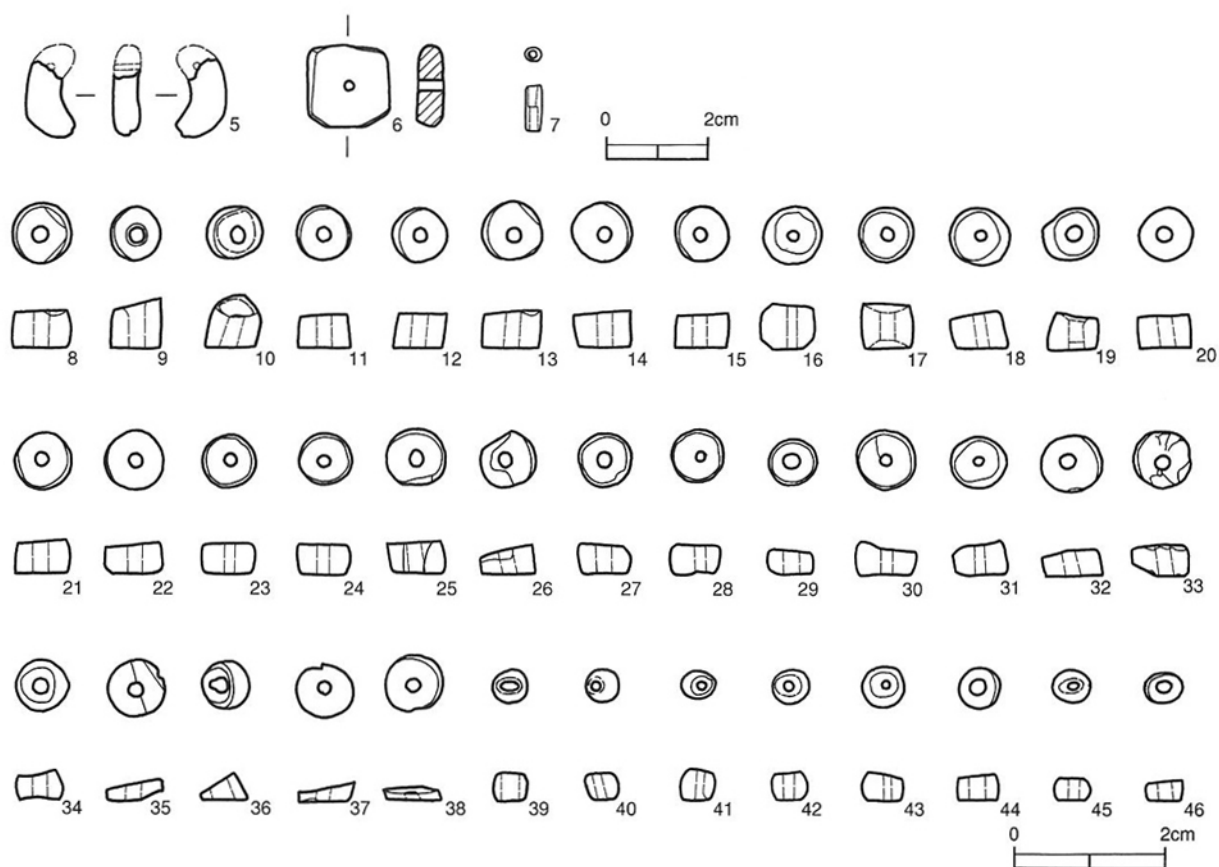
**出土状況** 玄室内から鉄鏃、馬具などの鉄製品と装身具が出土した。そのほとんどは奥壁側にかたまって出土しており、特に装身具は、奥壁側の右壁に寄った位置から出土している。しかし、その出土状況に規則性はみられず、後世の攪乱を受けたものと推測される。

その他、石室外からも数点の土器片が出土した。また、石室床面上部より中世の瓦質土器片と播鉢片が出土した。

#### 出土遺物

##### 鉄製品 (第12図 図版6)

鉄鏃 (1~4) 計測表を第5表に掲げる。



第13図 2号墳出土装身具実測図 (S=2/3、S=1/1)

第6表 2号墳出土小玉計測表

( ) は残存値

挿 図	直径mm	孔径mm	厚さmm	材 質	色 調	挿 図	直径mm	孔径mm	厚さmm	材 質	色 調
13-8	7.9	2.0	5.0	滑 石	灰白色	13-28	7.1	1.4	3.9	滑 石	灰白色
13-9	7.0	3.0	6.5	滑 石	灰色	13-29	6.5	2.1	3.1	滑 石	灰白色
13-10	7.3	2.6	6.7	滑 石	灰オリーブ	13-30	7.7	1.5	4.6	滑 石	灰白色
13-11	7.2	2.0	4.4	滑 石	灰白色	13-31	7.1	1.6	4.7	滑 石	灰白色
13-12	7.3	2.0	4.6	滑 石	灰白色	13-32	7.9	2.0	3.6	滑 石	灰白色
13-13	7.9	2.0	4.8	滑 石	灰白色	13-33	7.5	2.0	(4.0)	滑 石	灰白色
13-14	8.0	2.0	4.9	滑 石	灰色	13-34	7.0	1.9	3.5	滑 石	灰白色
13-15	7.1	2.0	4.5	滑 石	灰白色	13-35	7.4	2.0	(2.7)	滑 石	灰白色
13-16	7.1	1.4	6.2	滑 石	灰白色	13-36	6.4	3.0	3.7	滑 石	灰オリーブ
13-17	6.8	2.0	5.8	滑 石	灰オリーブ	13-37	7.4	2.0	(2.6)	滑 石	灰白色
13-18	7.8	1.3	5.3	滑 石	灰白色	13-38	7.8	2.0	(1.7)	滑 石	灰色
13-19	6.7	2.0	3.4	滑 石	灰色	13-39	4.6	2.4	3.6	ガラス	スカイブルー
13-20	7.1	2.0	4.5	滑 石	灰白色	13-40	4.6	1.4	3.7	ガラス	青緑色
13-21	7.5	2.0	4.4	滑 石	灰白色	13-41	4.2	0.8	3.8	ガラス	青緑色
13-22	7.6	2.0	4.0	滑 石	灰白色	13-42	5.0	1.5	3.8	ガラス	青緑色
13-23	7.2	1.3	4.3	滑 石	灰色	13-43	5.6	1.0	3.5	ガラス	コバルトブルー
13-24	7.2	1.9	4.1	滑 石	灰色	13-44	5.7	2.2	3.3	ガラス	コバルトブルー
13-25	7.9	2.0	4.1	滑 石	灰白色	13-45	5.0	1.5	3.1	ガラス	黄色
13-26	7.4	2.0	3.9	滑 石	灰白色	13-46	5.0	2.0	2.7	ガラス	青緑色
13-27	6.7	1.9	3.8	滑 石	灰白色						

装身具 (第13図 図版6)

土製勾玉 (5) 穿孔より上部欠損。残存長1.6cmを測る小型のもので、表面は黒褐色を呈する。

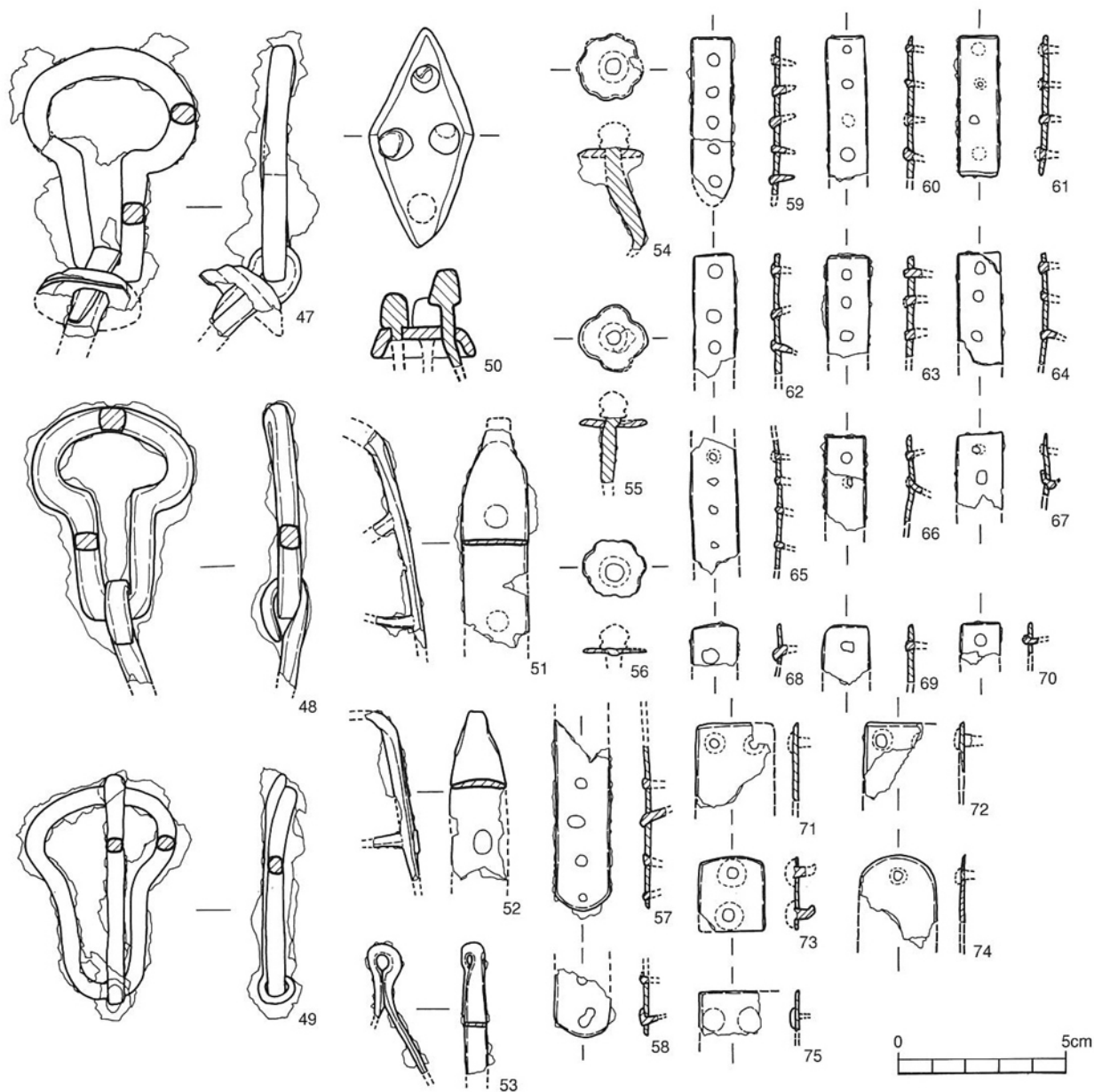
有孔石板 (6) 滑石製で1.6cm四方の正方形である。厚さ0.5cmを測る。

管玉 (7) 碧玉製で濃緑色を呈する。長さ0.9cmで両面穿孔である。

白玉 (8~38) 滑石製である。計測表を第6表に掲げる。

ガラス小玉 (39~46) 計測表を第6表に掲げる。





第14図 2号墳出土馬具実測図 (S=1/2)

馬具 (第14図 図版6)

47・48は鞆である。47・48はほぼ同型で、長さ7.0cm、幅5.2cmを測る。47には、直径3.1cmの円形座金具が残る。

49は鉸具である。長さ6.3cm、幅4.5cmを測る。刺金具を持つ。

50は鉄地金銅張りの飾金具である。長径6.5cm、短径3.2cmの菱形で鉸が4個中3個残る。

51～53は壺鐙の縁金具と思われる。

54～56は辻金具の花形座である。それぞれ8弁、4弁、6弁で鉄地金銅張りである。

57～70は壺鐙の鳩胸金具と思われる。裏に木質が残るものもある。

71～75は革金具である。鉄地金銅張りである。

(豊島)

### 3. 3号墳

#### (1) 調査前の状況

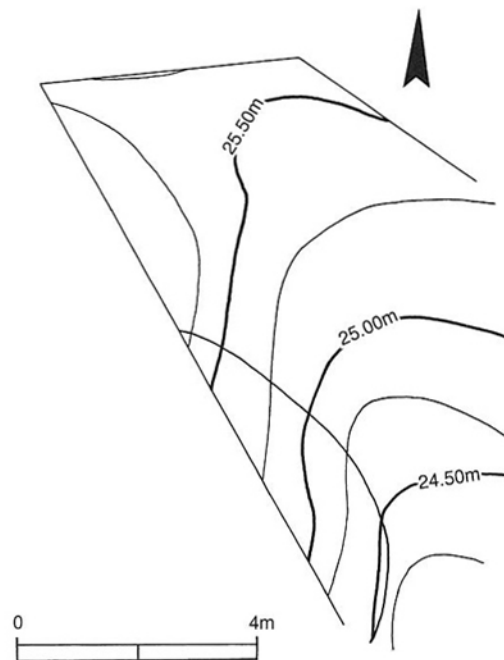
3号墳は、調査区の西の端に位置し、標高は25mに位置する。調査前は竹林で、2号墳から続く緩斜面であった。当古墳の主体部は工事予定範囲外にあり、本調査では墳丘の1/3の調査を行った。

#### (2) 墳丘

墳丘は、調査区外の石室の天井石が露呈していることから、墳丘頂部については、後世の削平を受けている。

トレンチ調査による土層観察から、直径約8.0mの円墳と推定される。

その築造行程は、まず地山整形を行い墳丘の盛土を行ったと推定される。



第15図 3号墳墳丘遺存状況図 (S=1/125)

また、古墳構築以前の円形の土坑が検出されたが、遺物が出土しなかったため、その時代等は確認できなかった。

(豊島)

### 4. 小結

浦辺古墳群は、3基の古墳の調査を行ったが、古墳に伴う遺物が出土したのは1号墳のみにとどまり、古墳群全体の時代決定をする資料に乏しい。

また、石室の構築方法も、石室の調査を行った2基の古墳がその構築方法に大きな違いがあるため、古墳群の性格等についても明らかにできなかった。

そこで、ここでは1・2号墳の特徴を記すことにより、小結としたい。

1号墳は、その出土遺物から、少なくとも6世紀後半から末には築造されたと思われる。その後少なくとも、7世紀前半、中頃、後半の都合3回の追葬が行われており、7世紀末まで古墳が存続していたとみられる。

追葬を行う際、前葬の副葬品を玄室の玄門付近、若しくは羨道部の両側壁に分けて掻き出したと思われる。当時の追葬方法の一端が明らかとなった。

また、2号墳は、長さ3.5m、幅2.5mの県内でも有数の玄室規模を持ち、小玉類が右壁によった所から出土していることから、同時に数体、若しくは奥壁に平行に被葬者を安置した可能性もある。

(豊島)

第7表 浦辺古墳群古墳一覧表

( )は残存値 単位はm

号墳	墳丘		内部主体								玄門 閉塞	備考
	形状	直径	形式	主軸方向	石室長	玄室長	玄室幅	羨道長	羨道幅	玄門幅		
1	円墳	11.6	横穴式	N23°E	5.7	2.8	1.8	2.9	1.6	0.9	-	敷石
2	円墳	14.8	横穴式	N24°E	(5.9)	3.5	2.5	(2.4)	-	-	-	排水施設



浦辺・大浦・梅ヶ崎古墳群遠景



浦辺古墳群遠景



浦辺古墳群全景



1号墳完掘



1号墳墳丘



1号墳羨道部遺物出土状況①



1号墳羨道部遺物出土状況②



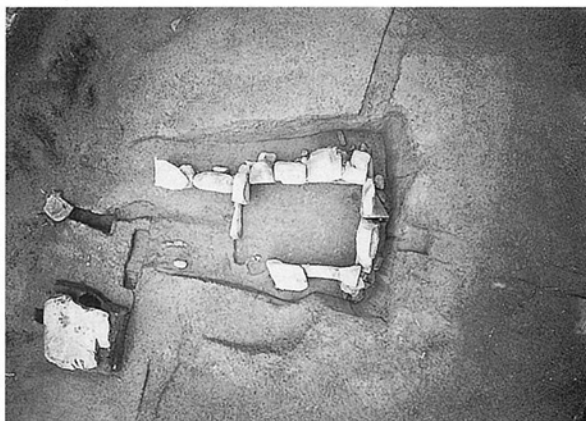
1号墳玄室内敷石



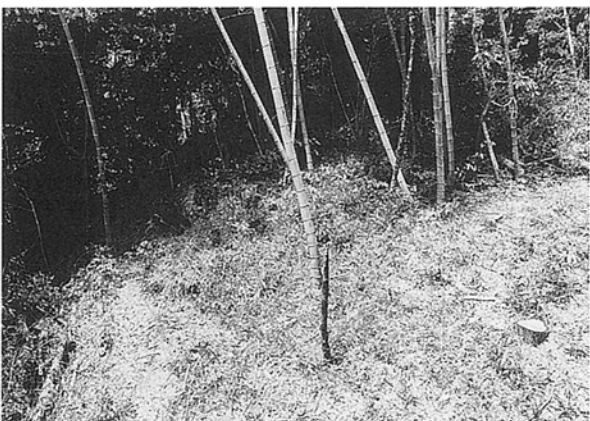
1号墳石室完掘



2号墳調査前



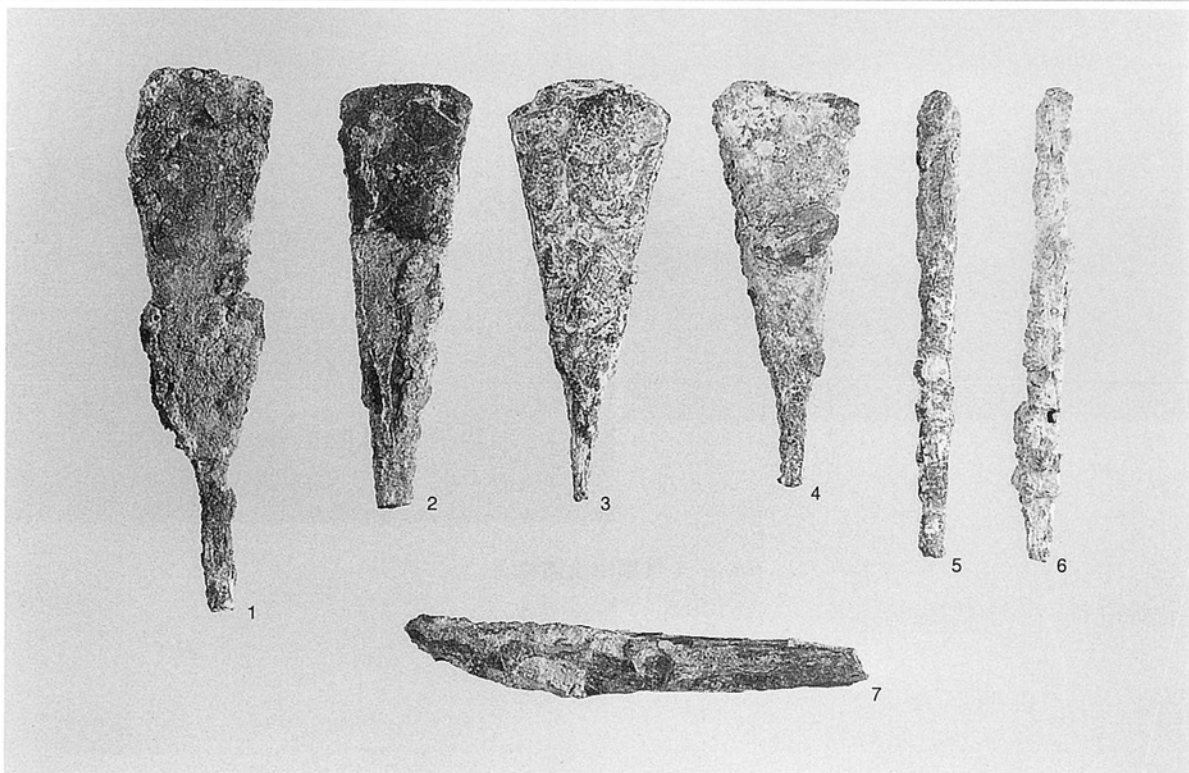
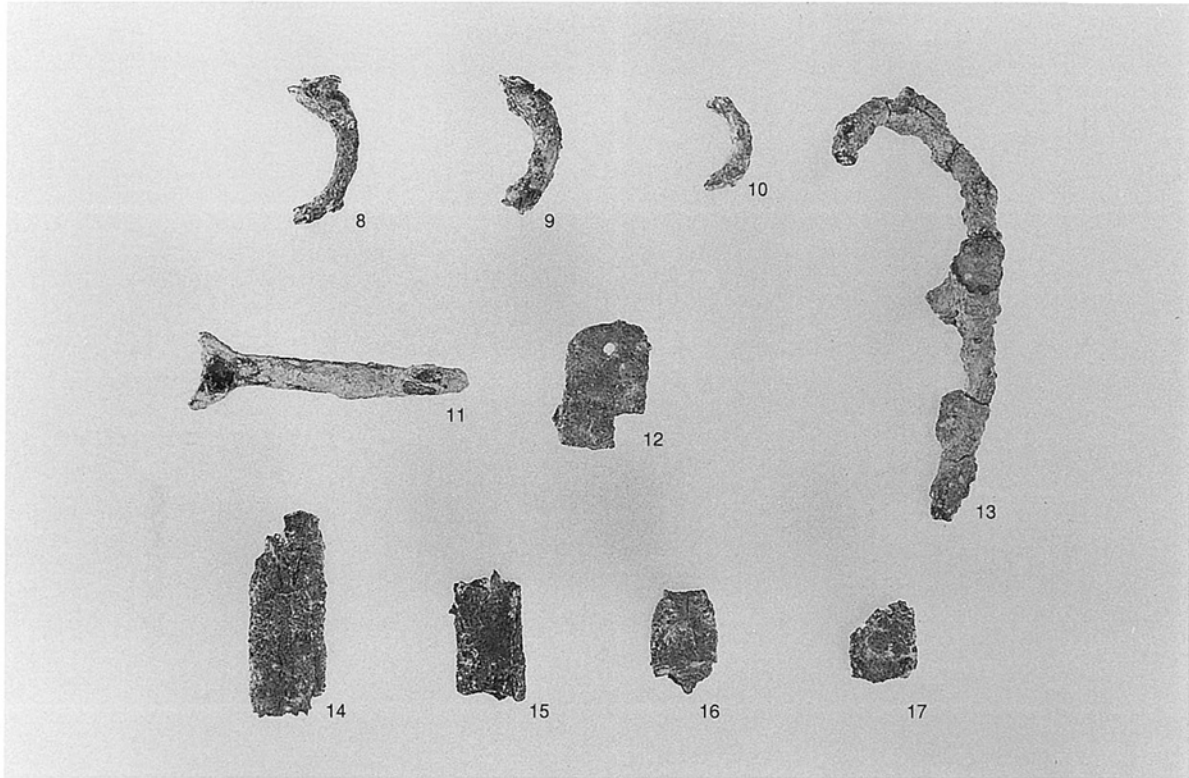
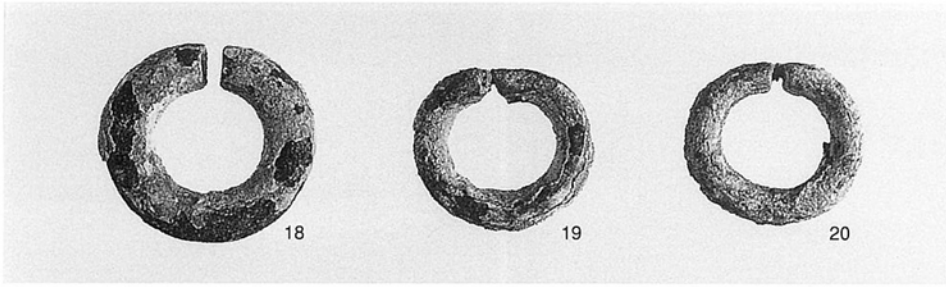
2号墳完掘



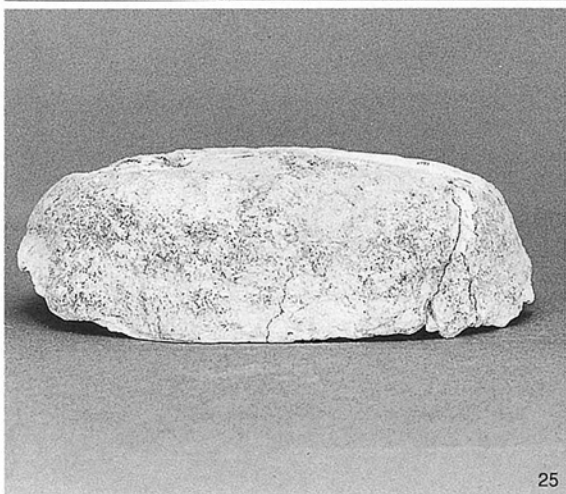
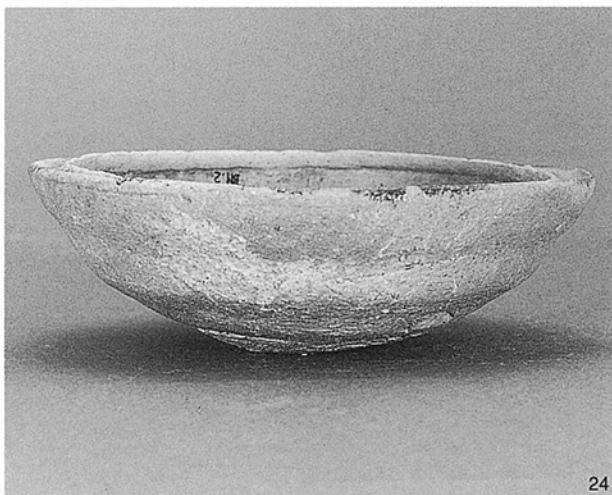
3号墳調査前



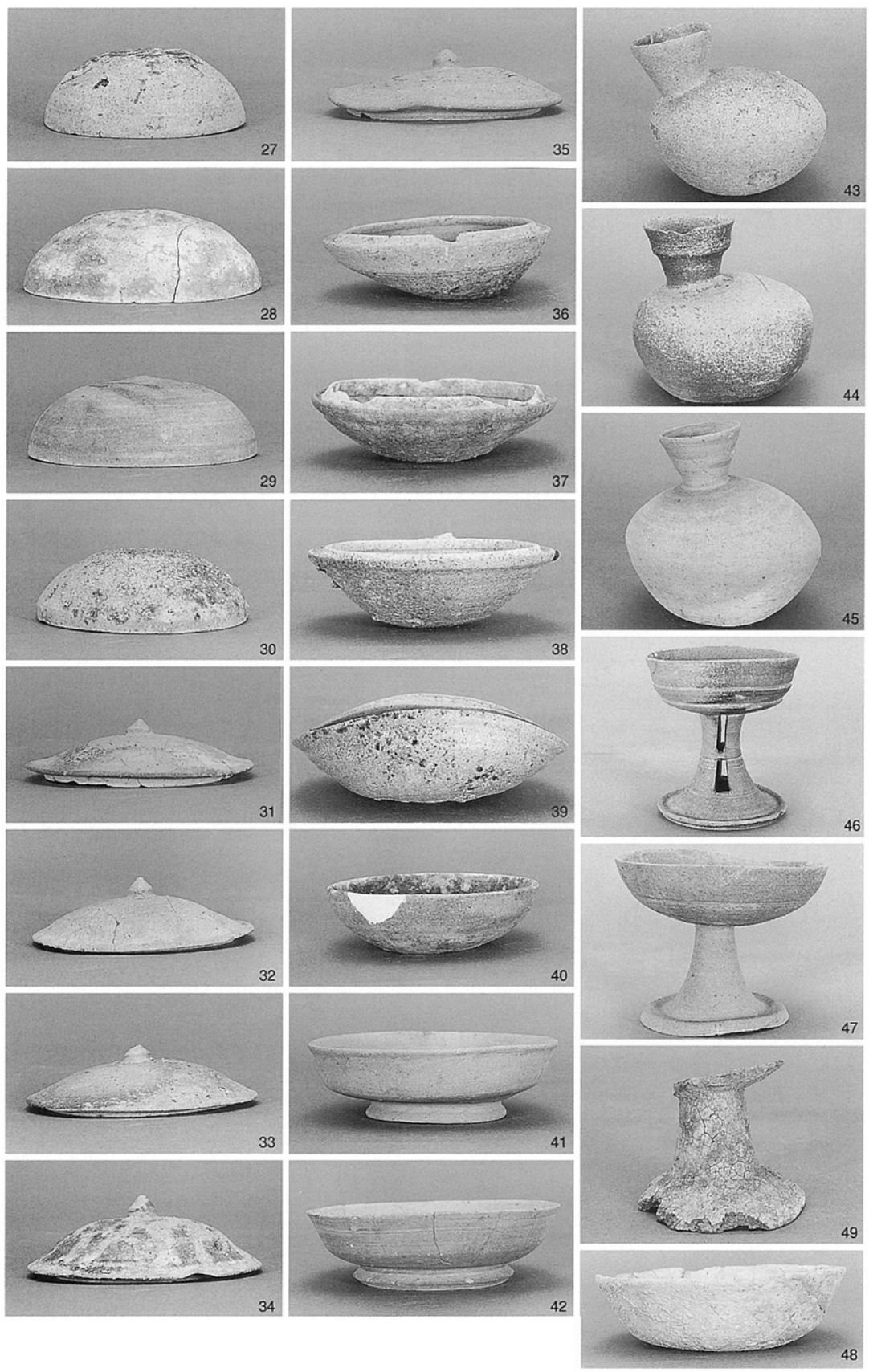
3号墳墳丘



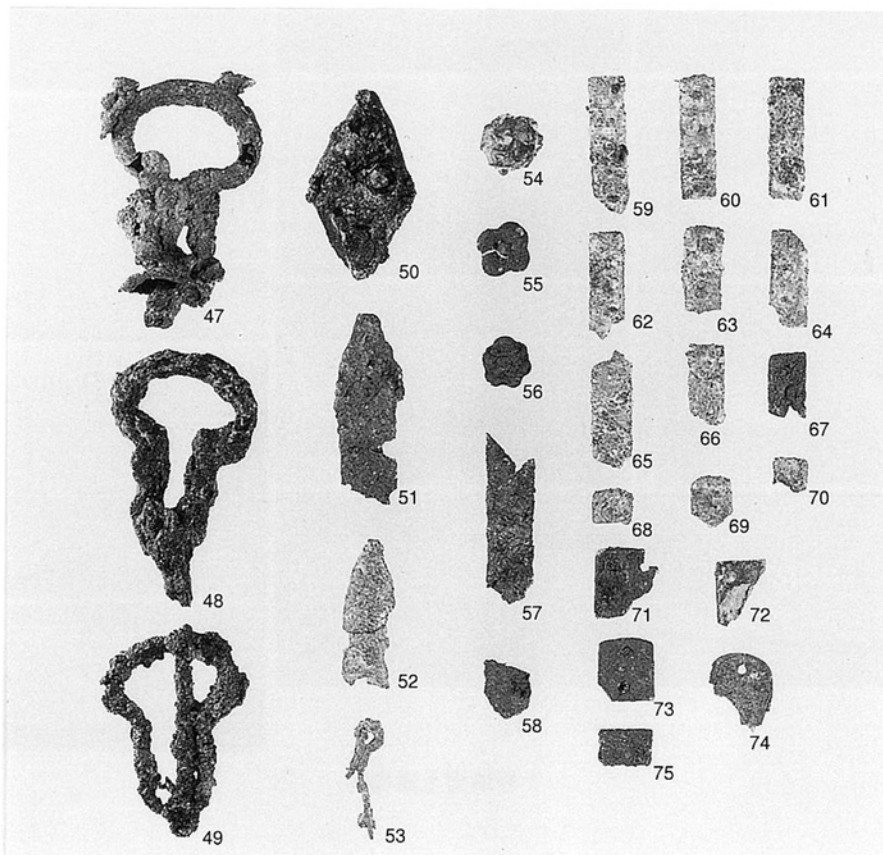
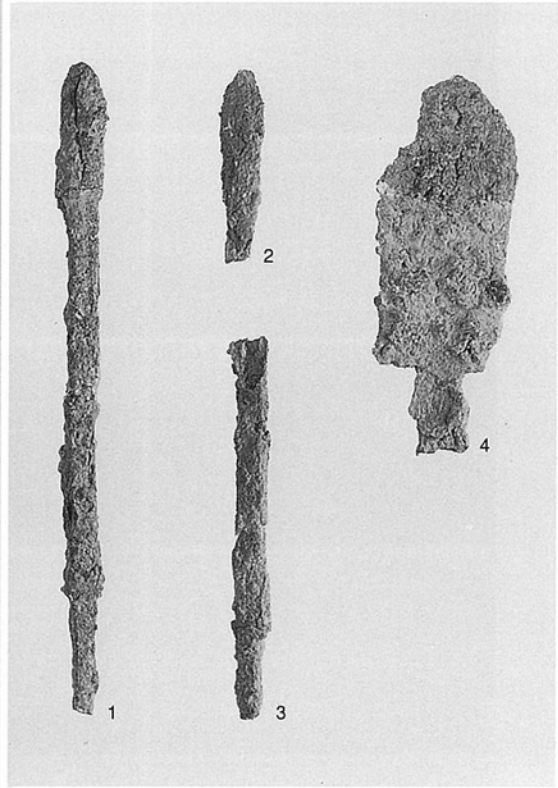
1号墳出土遺物①



1号墳出土遺物②



1号墳出土遺物③



2号墳出土遺物